

284

2020 夏号

拡がる建築家の職能・職域 ①

国・地域・文化を超えて

FORUM

日本のタネをケニアでカタチに
海外レポート

覗いてみました他人の流儀
建築ウォームアップ

温故知新

日本型規制社会と知的生産

良質な建築、これからのまちづくり

活動報告

わたしの愛用ツール



経済合理性を検討したうえで 設計者のニーズに最適な海外建材を提案

株式会社 東京工営は、海外建材のフローリング（無垢・複合・床暖房対応）や、デッキ（天然木・人工木）、羽目板などを扱う技術系の建材専門商社です。1998（平成10）年に前身の株式会社大阪工営／輸入資材部門として業務をスタートし、2007（平成19）年10月に設立されました。フローリング材は、オークを中心に顧客のニーズに合わせて多様な商材を取り揃え、既製品だけでなく、さまざまな特注案件に対応しています。

海外建材を取り扱ううえで大切にしていることを、下元宗郎社長にうかがいました。

限られた予算内で 多様な設計者のニーズに応える

当社は、海外建材を輸入・販売する専門商社です。私がこの仕事を始めた30年ほど前は、食料品やアパレルなども国産主義で、フローリング材も国産の銘木が良しとされる風潮でした。しかし、設計される方たちは常に銘木を求めているわけではなく、案件によっては節があってもいいし、板目と柃目が混ざっていても構わない。限られた予算内で、求められている優先順位が違うということがわかってきました。ですから、私たちはそのニーズに応えるため、海外で多様なネットワークをもち、最も適した海外建材を調達し販売しています。

一般的な製品販売以外に私たちが得意としているのは、ストライクゾーンの四隅を突くようなマニアックな分野です。創業時から、リーズナブルな価格で案件向け特注品を提供することにこだわっていたことを建築家の小嶋一浩先生が最初に面白がってくださり、これは大変自信になりました。

今の若い世代は、どの商品も国産であるかどうかはあまり気にしていません。建材も同じで、海外建材に目を向ける企業が増え始めています。時代は大きく変わったと感じています。

日本の基準を満たした 安心・安全な建材を提供

海外の建材を扱う上でまず大切にしているのは、安心・安全です。公的



フローリングを放射状に施工したクリニックの事例（設計：DOG一級建築士事務所 写真：中山保寛）

な試験機関の検査やJAS規格への適合、自社試験などを徹底して行い、日本の基準を満たしたものを提供しています。また、国産建材と比べて、品質や性能など相対的に見て割安に感じていただくことを重視しています。

当社の木質系フローリングは、機密性の高い現代の建築環境に適した含水率で出荷し、反ったり不具合のないように努めています。最近は複合材の技術が上がってきたこともあり、無垢材の風合いを持ちながらも扱いやすい、複合フローリング（表面単板2mm、3mm、4mm厚）が選ばれるケースが増えています。とくに、幅広のオーク系が商業施設や住宅などに人気です。

人工木デッキ「バイタルデッキ」シリーズは、人工木の長年の課題であった伸縮や吸水の問題をクリアしています。メンテナンスが簡単で割安感があり、販売を伸ばしています。

経済合理性に基づいた 最適なプランを提案する

既製品も数多く揃えていますが、カスタマイズや特注品にも柔軟に対応し、予算や納期、デザイン性など、総合的に経済合理性を考えながら最適なプランを提案します。

これまでの事例として、家具店舗への、店舗ごとのコンセプトに合わせた特注フローリングの提案などがあります。また、土足対応の床で、キズがつきにくく質感も残るマットな塗装で仕上げたいという要望には、海外の塗料メーカーと協議のうえ、硬度と耐摩耗性を確保したつや消し塗料を開発して対応しました。計画段階から参加し、サンプル作成を何度も繰り返すこともあります。

これからも、こだわりの商材をリーズナブルな価格でご提供できるよう追求してまいります。



株式会社 東京工営

<https://www.tokyokoei.com>

木製フローリング・木製デッキ・人工木デッキ・樹脂性フローリング・木製羽目板など、海外建築材料の輸入販売。

〒112-0014 東京都文京区関口1-24-8 東宝江戸川橋ビル9階
TEL: 03-5225-4080 FAX: 03-5225-4081

■商品サンプルを無料提供中です。お電話または当社HPよりご依頼ください。



CONTENTS

COLONNADE

4 特集：拡がる建築家の職能・職域 ① 国・地域・文化を超えて

- 5 PechaKucha 20×20 クライン ダイサム アーキテクト アストリッド クライン
マーク ダイサム
久山幸成
- 8 アメリカでの経験とその後の活動 KBKS 中村 暁
- 9 北欧の建築やデザインの魅力を広める ―北欧建築・デザイン協会(SADI)における活動を通して―
リオタデザイン 関本竜太
- 10 英国から世界へ ホブキンス・アーキテクト 南雲要輔
- 11 境界を越えた経験を自分の財産に UME architects 梅原 悟

FORUM

12 連載：日本のタネをケニアでカタチに 第1回

ソシアルデザイングループOSA ―その軌跡と展望― OSA ジャパン 坂田 泉

14 海外レポート ドバイでのアクション

waiwai 寺本健一

16 覗いてみました他人の流儀 高山 明氏に聞く 観客の身体感覚や知覚を動かす演劇のかたちを模索する

Bulletin編集 WG

19 建築ウォームアップ ―建築のはじまりかたを探る― オンデザインの実験

オンデザインパートナーズ 西田 司

20 温故知新 言葉

小川真樹建築総合計画 小川真樹

21 抱負を語る 働く場としての医療福祉建築

共同建築設計事務所 山田明子

抱負を語る 私の建築家像

畝森泰行建築設計事務所 畝森泰行

22 連載：日本型規制社会と知的生産 ―イタリアン・セオリーから学ぶもの― 第1回

「イタリアン・セオリー」から読めること(前編)

大倉富美雄デザイン事務所 大倉富美雄

25 良質な建築、これからのまちづくり

平和通り商店街アーケード老朽化問題に関わり感じたこと

クロトン 下地鉄郎

26 活動報告 NPO法人建築家教育推進機構をご存知ですか

atelierA5 建築設計事務所 清水裕子

28 交流委員会 A グループ 旧三河島污水処分場唧筒場施設見学会

三谷セキサン 賀川昌一

29 交流委員会 C グループ 建物見学会「出雲・松江・米子」報告

ニッター 日東英成

30 わたしの愛用ツール

電卓とシャープペンシル／オリジナル電気プレート／Apple Macintosh

BACKYARD

31 広報からのお知らせ 「JIA・SDGs建築フォーラム2020」開催延期のお知らせ

建築系学生のための情報サイト「LUCHTA」と連携しています

31 編集後記

2 パートナーズアイ 株式会社東京工営 経済合理性を検討したうえで設計者のニーズに最適な海外建材を提案

表紙写真：PechaKucha Night Tokyo vol.165 (撮影 Brian Scott Peterson)

公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-3-18 JIA 館

Tel: 03-3408-8291(代) Fax: 03-3408-8294

<https://www.jia-kanto.org/>



2020年度テーマ

広がる建築家の職能・職域 ①

国・地域・文化を超えて

はじめに

『Bulletin』では、2020年度も昨年に続き年度テーマを設定し、年間を通してテーマに沿った特集記事を掲載していきます。

今年度のテーマは、「広がる建築家の職能・職域」です。2020年初頭より新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響が拡大し、私たちは予期せぬ急激な社会環境の変化の中に立たされています。しかし、こうした感染症の影響を別としても、急速に変化し流動化する社会、情報化・多様化する世界の中にあって、近年、建築家の職能・職域、そして果たすべき役割は大きく変化し拡張していると考えられます。建築という専門性の礎の上に、地域や分野・領域、そして従来の建築家の設計活動の枠組みを超えたさまざまな活動が、JIA内外を問わず広く見られます。

今年度の特集では、そのような多岐にわたる実践に取り組む方々の活動についてご紹介いたします。年度を通した構成は、以下を予定しています。

夏号：広がる建築家の職能・職域 ①

「国・地域・文化を超えて」

第1弾となる今号においてはサブテーマを「国・地域・文化を超えて」と題し、グローバル化する世界の中で、国境や文化を超えて活躍の場を拡げている建築家や組織、そしてその実践に焦点を当てています。海外出身で国内で活躍する建築家や、逆に海外をフィールドに活躍する日本の建築家の個々の活動。また、建築家ならではの国際交流や地域貢献のあり方について、具体的に紹介いたします。

折しも1月のJIA「新春の集い」において、六鹿正治会長より、SDGsへの取り組みに象徴される建築家のリーダーシップ、行政との連携強化に加えて、建築家の「国際性」の重要性が語られました。本特集で執筆いただいた方々のその多様な活動から、国内外を問わず、今後の建築家が果たしうる役割や職能としての可能性が感じら

れるのではないのでしょうか。

秋号：広がる建築家の職能・職域 ②

「領域・分野を超えて」

第2弾となる秋号では、「領域・分野を超えて」をサブテーマとし、建築、土木、都市計画、ランドスケープ、環境、家具・インテリアといった、従来の縦割り型の分類を超えた活動や異分野を架橋する活動、そしてCM/PM/FM、不動産、コンサルティングなど関連領域を横断し、設計や協働のかたちを拡張し推し進める方々の取り組みについて具体的にご紹介する予定です。

冬号：広がる建築家の職能・職域 ③

「設計を超えて」

第3弾となる冬号では、「設計を超えて」と題し、建築設計やデザイン、監理あるいはそれらにまつわるマネジメントや協力業務を超えて、さらに、事業そのものや施設運営、制度面での改革等、ともすれば設計の在り方自体をメタレベルから問い直すような活動を取り上げたいと考えています。

いみじくも「広がる建築家の職能・職域」というテーマ自体が示唆しているように、各号の分類はあくまで便宜的なものであり、むしろ互いにオーバーラップし、建築家の活動の多様性があぶり出されるようなきっかけとなることを企図しています。

特集の最後となる春号においては、年度テーマを振り返り、また新たな視点を獲得できるような企画を今後検討していく予定です。建築家という職能それ自体や、その伝統・教育の中に、社会の変化や職能・職域の拡張に柔軟に対応する遺伝子が存するとして、年度を通して、その一端と未来への可能性が誌面から感じられるような特集になればと願っています。

(『Bulletin』編集長 会田友朗)

PechaKucha 20 × 20

クライン ダイサム アーキテクツ
アストリッド クライン
マーク ダイサム
久山幸成



2020年4月20日現在、世界中で新型コロナウイルス感染拡大に伴い各国で外出禁止や自粛措置が続いている。東京も同様に4月7日に発令された緊急事態宣言のもと、人と人との接触機会を減らすべく在宅勤務や外出自粛措置がとられている。

そのような状況の中、^{ペチャクチャ *1} PechaKuchaは新たな一歩を踏み出すこととなった。4月10日、16日、INSPIRE the WORLDを冠したPechaKucha オンラインイベントが開催された。世界的な危機的状況のなかでクリエイターたちはどのように生き、この先にどのような未来を描こうとしているかを人々に届けるイベントとなっている。

INSPIRE the WORLD

PechaKucha 20 × 20 は、2003年に私たちが始めたひとつのイベント PechaKucha Night 東京から始まった、

現在世界1,220以上の都市に広がるクリエイティブ・プラットフォームである。各都市のオーガナイザーがそれぞれのコミュニティでPechaKucha Nightイベントを開催しているのが特徴で、現在はオンラインベースのプラットフォーム構築にも力を入れている。

INSPIRE the WORLDは、2010年ニュージーランドのクライストチャーチの震災後に、PechaKuchaの各都市が被災地支援のファンドレイズのために開催したINSPIRE (元気づけるの意味) イベントが始まりである。東日本大震災の際にも世界中のPechaKucha都市から多くの支援とメッセージが届けられた。非常事態にあるときも人々のポジティブティ、クリエイティブティを世界中に届けるという活動を続けることによってPechaKuchaのネットワークが世界の問題解決の一助となりうる大きな可能性を示すものとなった。



デザインイベント時に開催したスペシャルイベントの様子

(撮影: Michael Holmes)



2020年4月16日に行われたオンラインイベントの様子

PechaKuchaの生い立ち

なぜ私たち建築家がこのようなイベントを立ち上げ、続けることになったのか。それは建築家として常に問題解決と向き合いながら日々建築を実現することに取り組んでいるからだと思う。建築は、依頼する人、設計する人、施工する人が最終的にそれを利用する人のためにさまざまな課題と向き合いながら実現するという常にポジティブな関係の構築によって成り立っているからに他ならない。

PechaKuchaが生まれた2003年当時、私たちは複数のクリエイターとDeluxeと名付けたシェアオフィスで活動しながら、イベントスペースとして西麻布にSuperDeluxeというスペースの運営を始めた。平日のイベント収入が厳しいことから、何か自分たちでイベントを企画しようということになった。

当時デジタルカメラが普及し始め、オフィスではプロジェクトの進捗報告でデジタル写真をMacのKeynoteにまとめたスライドショー形式によって報告するスタイルを始めていた。いまでは当たり前になっていることだが、当時は誰もが簡単にスライドレクチャーを始められるということは極めて画期的なことだった。

そこで私たちはその仕組みを使いながら、まだ作品が少なく講演などできない若い人でも参加できるイベントを企画しようということになった。建築家のレクチャーといえば膨大なスライドと長い話というイメージだが、20枚のスライドに限定し、しかも1枚につき20秒という制限を設け、登壇者は1人につき6分40秒という短いトークにして1回のイベントに10人出演してもらうことにした。1人の登壇者が5～10人の友人を誘えば100人規模の集客が見込めると考えたからである。そうして2003年2月20日20時20分、PechaKucha Night東京が誕生した。



2011年世界各国で行われたINSPIRE JAPANイベントのポスター（の一部）

スターではなくヒーロー

誰もが主役であるというPechaKuchaスピリット

この20枚×20秒というフォーマットが、建築家だけでなく多くのクリエイターが自身の作品や見たこと体験したことを紹介することにとっても有効だったことで、東京でのイベントは回を重ねるごとにさまざまなプレゼンターに登壇してもらうこととなった。クリエイティブには常にインプットが必要だが、私たちにとって月に1回さまざまなプレゼンターの刺激的なプロジェクトに出会うことは、貴重なインプットとコミュニケーションの場となっていった。

特に私たちがPechaKuchaの魅力と考えているのは、有名人やスターだけでなく、誰もがプレゼンターとして作品や活動をシェアできるところである。垣根のないフラットな仕組みのおかげで隠れたヒーロー、ヒロインが毎回ステージに現れる、まさに誰もが主役であるという空気がその場に生まれる。そしてその場にいる参加者がまたそのPechaKuchaスピリットに共感するというポジティブな循環が生まれ続けていく。

次第に東京で登壇したり、参加したりしたクリエイターから自分たちの都市でも開催できないかという声が上がり、各都市のオーガナイザーが生まれることとなった。彼らは私たちと同じように本業を持ちながらパッションで自分たち都市のPechaKuchaを運営し、コミュニティに貢献している。建築が完成した後、それを使っていく人の情熱によって生きられるものとなるようにPechaKuchaもこのように多くのオーガナイザーたちの情熱によって支えられ、各コミュニティや都市の魅力が日々再発見されているのである。まさに運営する人とそこに参加する人がみな主役であるというスピリットによってPechaKuchaは生きている。

Creative Games 2020 より良い世界のために

2020年、20×20を冠に抱き東京で生まれたPechaKuchaにとって、東京オリンピックが決定したときから特別な年になるよう計画してきたことがある。それはCreative Gamesというクリエイティブの祭典を東京で行うことだった。東京から世界に広がったPechaKuchaのネットワークに呼びかけ、世界中からさまざまなプレゼンターが東京に集まってPechaKuchaを行うもので、Creativity in your cities を合言葉にそれぞれの未来について語り合う場にしたいと考えていた。

現在の新型コロナウイルス感染症の世界的流行の影響で、この企画を今年実現することは非常に難しい状況となったが、私たちはこういう状況だからこそ、世界中の人々がどんな未来に何を思い描くのかを知りたいという気持ちがより強くなっている。プレゼンテーションのオンラインプラットフォーム化も数年前から同時に進めており、PechaKuchaのプラットフォームによって世界の人々がより良い未来を思い描ける新しい企画として再検討を進めている。

この夏にはWorld Architecture Foundationと共同で“Isolation Transformed”をテーマにコンペが開催される^{*2}。PechaKucha Createというオンラインシステムを利用してサブミットする、これまでのコンペとは違ったユニークなものになるだろう。

建築家として問題を乗り越え、新しい価値をつくり出せるよう、世界中のクリエイティビティに常に触れるこ



世界各都市のオーガナイザーが東京に集まり会議を行ったPechaKucha PowWow2018 (撮影：Brian Scott Peterson)

とができるよう、これからもPechaKuchaとそのネットワークを育んでいきたいと考えている。

*1: pechakucha.com

*2: worldarchitecturefestival.com

Astrid Klein (アストリッド クライン)

1962年イタリア・バレーゼ生まれ。1986年エコール・ド・アール・デコラティーフ卒業(フランス・ストラスブール)。1988年ロイヤル・カレッジ・オブ・アート修了。1988年伊東豊雄建築設計事務所。1991年クライン ダイサム アーキテクト設立。2009年〜武蔵野美術大学客員教授。

Mark Dytham (マーク ダイサム)

1964年イギリス・ノーサンプトンシャー生まれ。1985年ニューキャッスル大学卒業。1986年SOM(アメリカ・シカゴ)。1988年ロイヤル・カレッジ・オブ・アート首席修了。1988年SOM(イギリス・ロンドン)。1988年伊東豊雄建築設計事務所。1991年クライン ダイサム アーキテクト設立。

久山幸成 (ひさやま ゆきなり)

1973年兵庫県生まれ。1996年横浜国立大学工学部建設学科建築学コース卒業。1996年〜クライン ダイサム アーキテクト。2007年〜関東学院大学非常勤講師。2016年〜桑沢デザイン研究所非常勤講師。



PechaKucha Night Tokyoの様子 東京は4月のイベントで170回を数える

(撮影：Brian Scott Peterson)

アメリカでの経験とその後の活動

アメリカ建築家協会日本支部前会長
KBKS
中村 暁



ニューヨーク州のプラットインスティテュートを卒業し、当時の建築学部で学部長であった、トーマス・ハンラハンのもとで働き始めました。所員5名程度のアトリエ設計事務所で、私が最初に担当したのが芸能プロダクションオフィスでした。その後はコミュニティセンターや新興宗教の施設など、さまざまな用途の建築物の設計に関わりました。施主や施工業者との英語でのコミュニケーションは非常に困難でしたが、図面や模型を通して考えを伝えることができたので、多くの情報をそれらに詰め込む努力をしました。

2008年にリーマンショックがアメリカを震源として起こり、事務所の仕事も少しずつ減り、2010年に帰国しました。その当時の多くの外国人建築家の選択肢は帰国するか、大学に戻るか、多くのプロジェクトが進行していた中国に移るかでしたが、帰国を選択しました。帰国後はアメリカとの繋がりを残したいと思い、ゲンスラーの東京事務所に転職しました。ゲンスラーでは建築という構築物の設計というよりは、エクスペリエンスを生む場の提案に重きが置かれていました。6,000人規模の組織設計事務所のアプローチは、ハンラハンのような正統派モダニストのそれとは大きく異なりました。この両方の事務所で学んだことは私にとって非常に良い経験であったと思っています。ゲンスラーでは役割分担制であったため、今では私と同様にこの設計事務所から独立していった仲間とお互いの強みを活かし共同作業を行うこともあります。先日、仲間の1人から建築専門用語に対応できる通訳者として声が掛かり、2日間通訳業務のお手伝いをしました。



AIA Japan 2019の忘年会、ホテルニューグランド本館にて

これは建築分野から派生して依頼された仕事であります。今後も業務依頼を受けていきたいと思っています。

日常の業務に加え、昨年はアメリカ建築家協会日本支部 (AIA Japan) の会長を務めました。現在、AIAの総会員数は約94,000人で、日本支部には昨年時で93名のアーキテクト、インターナショナルアソシエイトおよびアソシエイト会員が在籍しています。各支部では年間18学習単位以上を提供することが義務付けられています。AIA Japanでは、各会員の持つネットワークを通して国内外の建築家による講義や、シンポジウム、街歩きを行う形で、学習単位を提供しています。昨年はフロリダ国際大学とAIA会員による“Resilience and the Built Environment”というシンポジウムを行い、明治大学の会場に約300名が集まりました。AIA Japanではデザインの知識を一般に普及させる活動として、これらの講義やシンポジウムを一般にも公開しています。

AIAでは近年、地球温暖化対策に伴う二酸化炭素 (CO₂) 排出量削減に力を注いでいます。二酸化炭素削減を含む環境対策には早くから注目し、建築家主導による気候変動対策に取り組んでいます。具体的には会員への教育を含めたリソースの提供および、国や地方議会、行政またはモデル建築基準作成団体 (ICC) への政策の提言などを行っています。今後は、CO₂削減目標達成に法的拘束力を持つ政策を導入する国や地方自治体が増えるでしょう。金融の分野においても企業の環境への配慮が1つの企業評価基準となる流れであり、企業はCO₂削減により積極的になってきています。私がコンサルタントを務めるある企業でも、2039年までにカーボンニュートラル達成という独自の目標を掲げており、具体的な方策を現在作成中です。あるプラントメーカーの営業担当者は、多くの企業から同様の相談が来ていると話していました。社会全体がカーボンニュートラル実現に向かう中で、この分野での建築家の多種多様な活躍の場が増えると思われます。

中村 暁 (なかむら あきら)

1976年ドイツ連邦共和国、ハンブルク生まれ。2004年プラットインスティテュート卒業 (ニューヨーク州)。2004年～10年ハンラハン・マイヤーズ・アーキテクト (ニューヨーク州)。2010年～19年ゲンスラー・アンド・アソシエーツ・インターナショナル・リミテッド。2019年KBKS設立。

北欧の建築やデザインの魅力を広める

— 北欧建築・デザイン協会 (SADI) における活動を通して —

リオタデザイン
SADI 理事
関本竜太



私は大学を卒業したのち、設計事務所での勤務を経て2000年にフィンランドのアールト大学(当時はヘルシンキ工科大学)へ留学した。留学のきっかけは、1998年にはじめて北欧を訪れた際に出会った、その懐深くおらかな建築空間や、穏やかな国民性などに魅了されたことなどが大きかった。現地での生活は、私にとって何ものにも代えがたい財産となった。留学を終えて帰国後、私は自らの事務所を立ちあげ、個人住宅を中心とした設計活動を始めた。何も売りにできるものがない駆け出しの私は、北欧で学んだデザインの考えや生活意識、そしてそこでつながった人脈を糧に、自分なりに活動領域を広げてゆくほかなかった。

北欧建築・デザイン協会 (SADI)

そんな折りに北欧建築・デザイン協会 (SADI) に入会させていただくこととなった。2002年にアルヴァ・アールトの住宅の展覧会を新宿のOZONEで開催し、私はその展覧会において事務局として関わることとなったのだが、SADIはその運営を手伝ってくださった実行委員会のメンバーの多くが所属しており、一緒に活動しようと声をかけていただいたのがきっかけだった。

SADIは、北欧諸国の建築とデザインを国内に紹介し、日本と北欧の相互理解や研究を行うため1983年に発足した協会である。初代会長は樋口清氏で、設立当時のメンバーにはアールトの事務所にも在籍していた武藤章氏の名もある。現在では会員数100名を数え、北欧建築ならびにデザインを愛好する者の団体としては国内最大規模の協会となっている。この協会では私は理事と企画委員長を兼任し、企画委員会を組織しながら年に6回程度の講演会等を企画している。北欧建築とデザインに関わる

講演企画を、これほどの頻度で開催している団体は国内では唯一ではないかと自負する。

企画立案における3つの軸

この講演企画の立案にあたっては、大きく分けて3つの軸がある。ひとつは国内在住の、北欧に関わる建築家やデザイナーの仕事にフォーカスを当て紹介するという軸。最近ではウェグナーのYチェアのペーパーコード張りを修復する職人に登壇いただき、目の前で張り替えを実演する企画があり、多くの来場者で会場が溢れた。

次に、会員相互の親睦の場を設けるという軸。これは年に一度の「北欧クリスマスの集い」や、アールトといった北欧の建築家の魅力や北欧各国の建築の違いなどについて、座談会形式で語り合うというもの。北欧と一括りにしても、北欧各国でその違いは大きく、それらを語り合うことで、それが結果的に会員相互の親睦になるという趣旨である。

そして最後に、北欧に惹かれる根を考えるとという軸。こちらは直接建築やデザインとは関係がなくとも、北欧諸国の文化背景を探ることで、どうして我々は北欧の建築やデザインに惹かれるのかという“根”を探ろうというものである。主に歴史家や研究者の方々にご登壇いただき、北欧の歴史や文化背景などについてのご講演をいただいている。

こうした個人活動は、本業である設計活動とは直接の関わりは持たないが、建築家という職能を考えたとき、我々はただ目の前の業務をこなすだけでは不十分であると考え。建築家は技術者であると同時に、文化の啓蒙者でなくてはならない。自らの経験に裏付けられた知識や人脈を活かし、建築文化を広め、人をつなげ、それを必要としている人に情報を拡散するという活動もまた建築家の職域であろう。

日本は歴史と素晴らしい文化を持つ国であるが、北欧の国々から学ぶべきことはまだまだ多い。日本と北欧とを架橋した建築家活動を今後も続けてゆきたい。



Yチェアのペーパーコード張り実演(講師:坂本茂氏)

関本竜太 (せきもと りょうた)

JIA正会員

1971年埼玉県生まれ。1994年日本大学理工学部建築学科卒業。1994～99年エディターネットワーク建築研究所。2000～01年フィンランドヘルシンキ工科大学(現アールト大学)留学。2001年、現地の設計事務所プロジェクトに関わる。帰国後、2002年リオタデザイン設立。

英国から世界へ

ホブキンス・アーキテクト
南雲要輔



私がマイケル・ホブキンス・アンド・パートナーズに入社した2001年4月、事務所は初めての国外プロジェクトを設計中だった。それまで研修のためのビザで勤務したEU以外の外国人はいたが、労働許可証を取得して雇用された人はいなかった。事務所がEU以外の人を雇うには、英国やEU内で人材がいなかったため、どうしても他から雇用せざるを得ない等の理由が必要になる。事務所は弁護士と相談し、初めて地震国ギリシャで設計するために地震国の建築士が必要で募集をしたが適当な人材が私しかいなかった、という理由で労働許可証を取得した。

入社後はアテネの建設会社とノッティンガム大学の設計を担当したが、7月には奇しくも東京の新丸の内ビルディングの設計競技をすることになった。その結果我々の提案が選ばれ、初めてのEU圏外のプロジェクトとなった。

2003年にホブキンスは初めて米国のプロジェクトを受注した。これはノッティンガム大学の建築主が、米国での国際会議において環境配慮型建築を望む北アリゾナ大学へホブキンス事務所を紹介してくれたことによる。地球温暖化など世界共通の問題に対する提案は、国境を越えて必要とされる。その後、米国の大学からの設計依頼は続き、事務所は6つの大学から設計を依頼されている。

2004年にはドバイのゲート・ヴィレッジ・マスタープランの提案が採用され、初めての海外支店がドバイに設立された。1998年にリチャード・ロジャースを議長にアーバン・タスク・フォースが設立されて以来、都市を検証しデザインによって再興をはかるマスタープランニングは、英国の建築家にとって重要な仕事になっている。

英国で建築を建てるには、プランニングアプリケーションを申請し許可を得る。この申請に、基本設計図書他にデザイン・アンド・アクセス・ステートメントと呼ばれるレポートを添付する。このレポートの中で、なぜその建築がその敷地に必要か、いかに都市の景観を向上させるか、どのように市民のために良い結果をもたらすかなど、既存都市の分析を基にした提案をしなければならぬ。こうした都市と繋がる建築デザインの提案が、国外からも評価され求められているように思える。

入社後4年が経ち永住権を得ると、英国の建築家資格

を取るよう事務所から言われるようになった。英国の建築家登録機関に問い合わせると、日本の建築士資格は考慮されないで英国の大学(RIBA Part 1, 2)卒業と同程度の教育を受けているかインタビューで判断することだった。3人のインタビュアーの前で1時間程、日本の大学の卒業設計、修士論文、実務経験と英国での修士研究を説明し質問を受けた。日本の経験は与えられた敷地と設計条件の中で良い設計をする試みとして評価されたが、その敷地にその建築を建てるのがその都市にとってどのように有効なのかという疑問を持たれた。英国での研究が、既存の都市を検証し問題点をあぶり出し、その環境を向上させるための提案だったので納得してもらい無事英国の大学卒業(RIBA Part 1, 2)と同等の資格を得た。

英国の建築家資格(RIBA Part 3)を取得するには、大学のパートタイムコースに入学して事務所の経営や設計契約・工事契約など実務に必要なことを学ぶ。そこで英国の設計業務はコンサルタントやコントラクターとの分業になっていることを学んだ。建築家は多くのコンサルタントやコントラクターを取り纏めて建築を設計するリード・コンサルタントという役割を担う。そのため、多くのコンサルタントから成るデザインチームの分業を指揮しコーディネートすることに慣れている。海外のプロジェクトを遂行する際、必ずその国の建築家やエンジニア、コントラクターと協働するが、国際的な協働体制をつくり運営することも国内と同様に進められる。

対する日本の建築家は、エンジニアとの区別がなく工学教育を受けている。エンジニアの区分も英国ほど細分化されてなく、より少ないコンサルタントの数でプロジェクトを進められる。コンパクトなデザインチームは決断も早いし、作成される設計図書は標準仕様書や標準詳細図などもあり効率良く整合性も高い。柔軟な日本のデザインチームが持つ優位性は世界のプロジェクトで生かすことができる。

南雲要輔 (なぐも ようすけ)

JIA正会員

1966年東京都生まれ。1990年日本大学大学院修士課程修了。1990-99年竹中工務店設計部。2001年AAスクール大学院DRL修了。2001年～ホブキンス・アーキテクト。作品に、新丸の内ビルディング、ハックニーサービスセンター、ブレント・シビックセンター、聖トーマス病院イーストウイングほか。

境界を越えた経験を自分の財産に



UME architects
梅原 悟

1996年、大学院修了後、デンマーク王立芸術アカデミーへ留学した。学生時代、海外旅行でいちばん住んでみたいと思った街コペンハーゲンで、1年半、建築を肌で感じながら時間を過ごした。デンマークのデザインは建築や家具が有名だが、プロダクトや家電、食器など何気なく目や手にするモノがシンプルかつスタイリッシュ、まさに自分好みであった。何より、自分の知識や経験の未熟さを痛感する良い機会になった。

1998年、オランダの建築事務所 Wiel Arets Architects で働き始めた。現在、スイスやドイツにもオフィスがあるが、当時、Wielを中心に、デザイナー（設計）、テクニカル（ディテール）、インターン（半年単位）、秘書、PRという構成で、『EL Croquis』や『a+u』等の雑誌にも特集が組まれていた有名事務所とはいえ、オランダ人を中心に欧州人ばかり。日本人はおろか、ビザが必要なスタッフは自分が初めてという状況であった。当時のオランダは現代建築の最先端、そのデザインの特徴は非常にユニークといえ、正直なところ好みではなかったが、その点 Wiel Arets の建築は例外であった。

オランダの意匠系建築設計事務所は企画から基本・実施設計ぐらいまでで、以降の施工図面や現場監理は別の専門事務所に委託することも多い。その中で、所内にテクニカルスタッフがいるのはとても勉強になったし、何より設計意図を共有できるのはデザイン面で心強かった。

プロジェクトは1割程度しか実現しなかったが、その分、多種多様で国際的、プログラムも厳密なものは少なく、むしろ進めながらどんどん変わっていくもの、中にはクライアントが代わるものすらあった。スプーンなどのキッチンウェアから、家具、インテリア、建築そして都市計画まで、スケールも幅広い。住宅のような小さなプロジェクトでも、構造はもちろん、設備とも常に協働する。それは環境レベルでクリアすべき法的なハードルが高かったこともある。他にも必要に応じて、いろんな専門家（ランドスケープアーキテクトやアート・インテリアコーディネーターなど）と協働することが多く、特に生物学者へのヒアリングは、有名な動物専用橋以外にも鳥の飛ぶ方向（空港付近の高層ビル）や水生生物の領域（水辺のコンプレックス）など、刺激的であった。オランダはワークシェ

アリングや分業化が世界トップクラスということもあり、個人よりもチームで仕事の方が主であった。

自分が主担当だったのは、集合住宅（プロジェクトの約半数）、住宅、超高層（27歳で初プロジェクトリーダー作品、1999年当時竣工していればオランダ1の高さ150m）、ホテル（5つ星）、コンプレックス、カトリック教会、サッカースタジアム（日本代表の堂安律選手が昨季まで所属）、各種コンペなど。常に関わりを持つ行政もルールだけではなく、都市や環境そして景観に対して何がベストなのかを専門家と一緒に考えたり、既成概念や法令の枠にとられない提案を受け入れたりする姿勢に感心した。

2010年、東京の住宅A'Houseを機に帰国する。オランダ人クライアントのための週末住宅という小さなプロジェクトであったが、オランダ人・日本人それぞれの考える常識の差異や製品の規格の違いもあって、想像以上に難航した。オランダにも多くの有名外国人建築家による建築が建っているが、どれも傑作とはいいがたい。それには契約も関係しているだろうが、知識とやはり現地の協力建築家とのコミュニケーションが大事である。

現在、アメリカの建築事務所と協働で住宅（京都）を設計している。以前の苦い経験もあって、正直、断ろうと思ったが、これまでと違った経験という意味でも挑戦することにした。予想通り大変なことも多いが、かなり良い建築になるのでは、と自分自身も期待している。

併行して、4つの大学で非常勤講師をしている。安定志向の強い今の学生に、海外の事例を多く紹介し、興味をもっと持ってもらい、あわよくば実際に留学や海外で働いて視野や見聞を広げてほしいと思っている。海外が日本よりも優れているということではなく、日本では決して味わえない経験をしてもらいたい、という想いもある。

境界は国や言語といったものではなく、

自分の中に存在するのではないだろうか。

経験することで真に理解し、自分の財産となる。

梅原 悟（うめはら さとる）

JIA 正会員

1972年京都生まれ。1994年京都工芸繊維大学卒業。1996年同大学院修士課程修了。1996～97年デンマーク王立芸術アカデミー（コペンハーゲン）留学。1998～2013年 Wiel Arets Architects 勤務（オランダ）。2010年 UME architects 設立。大阪市立大学、立命館大学、近畿大学、大阪工業大学にて非常勤講師。

ソーシャルデザイングループ OSA

—その軌跡と展望—



JIA国際委員会
一般社団法人
OSA ジャパン
坂田 泉

はじめに

2011年3月末。私は30年近く勤めた前川國男建築設計事務所を退職し、アフリカ、ケニアとの技術協力を目的とする組織、一般社団法人OSAジャパンを起業した。

2011年3月といえば、未曾有の大震災が日本を襲った年。私の起業はその前年に決意したので、震災との関連はない。しかし、今にして思えば、日本にとっての大きな節目に、私自身の人生の折り返し点が重なったことに宿命を感じる。

そして、来年で10年目を迎えようという今、折しも、新型コロナウイルスが全世界を閉塞に追いやっている。日本とケニアをまたぐ私の活動もその影響を受けざるを得ないだろう。変わりゆく世界のありようを追いながら、これから4回にわたり、これまでの軌跡と展望を描いてみたいと思う。

原点

なぜ、アフリカ、それもケニアなのか。それはまったく思いもよらぬところから舞い込んだ招待だった。前川事務所に勤めて10年ほど経ったある日。母校、京都大学から、ケニアの大学で建築を教えてみないかという誘いを受けた。その大学とは、ジョモ・ケニヤッタ農工大学 (Jomo Kenyatta University of Agriculture and Technology、以下、JKUAT)。日本が1980年代からODA (政府開発援助) の一環として、校舎の建設、カリキュラムの整備、教員の派遣、留学生の受け入れ等、まさに手塩にかけて育ててきた大学だ。私は1994年から1年間、JICA (国際協力機構) 派遣専門家として、JKUATの建築学部で設計と建築論を教えることになる。



学生と共に (1995年)

担当したのは、建築学部の第1期生として全国から集まった選りすぐりの俊英たち。私は平日の5日間、そうした「エリート予備軍」相手に授業を受け持つ一方、休日には「もうひとつの仕事」に没頭した。スケッチブック片手に町を歩き回り、道端でたくましく生きる人々の姿を描きとめていったのだ。



「Jua Kali (熱い太陽)」と呼ばれる露天職人

そこで感じたのは、社会の底に充満する人々の力だった。道端でたくましく生きる人々が体現する「道端の力」と、大学で学生たちに伝えられる「大学の力」。いつしか、この「ふたつの力」が私の中で大きなテーマとなっていく。ケニアという社会のあるべき姿を考えた時、この「ふたつの力」を共に活かすことがどうしても必要ではなかったか考えたのだ。

「大学の力」に象徴される現代の技術や知識がケニアにもたらすものは測りしれない。しかし、「大学の力」とは無縁に生きる人々も、自分たちが手に取れる手段と創意で日々の暮らしを構築している。この人々の力に眼を向け、その力を活かすことを考えない限り、ケニア社会の上から下まで行き渡る豊かで明るい未来は実現できないのではないかと—そうした「宿題」のようなものを抱え、私は帰国した。^(注1)

「虹プロジェクト」の立ち上げ

帰国後15年の歳月を経た2010年8月、私は、日本とケニアの間に虹を架けるような仕事をと、在日ケニア人建築家のDick Olangoと「虹プロジェクト」を立ち上げた。虹は何かと何かの「間」に架かるもの。日本とケニアのどちらかがどちらかを主導するのではなく、同じ地平に立ったもの同士が互いにできることを通じて、何かす

ばらしいものを生み出してゆこうと考えた。この思いは、ケニアの社会にみなぎる「人々の力」を活かすべきだという考えにも通じている。日本とケニアの「間」のそうした可能性を象徴するのが「虹」という言葉^(注2)だった。

ソーシャルデザイングループ OSA

「虹プロジェクト」には日本とケニアにふたつの拠点が必要だ。そこで私たちは、2011年1月、まず日本側活動拠点として、一般社団法人 OSA ジャパンを設立した。同年5月には、国連大学研究員(当時)でエコノミストの Emmanuel Mutisya をメンバーに迎え、2012年8月には、Olango と Mutisya がケニア側拠点として OSA Kenya を設立した。OSA ジャパンと OSA Kenya は、メンバーそれぞれの職能とネットワークを活かし、「日本のタネをケニアでカタチに」をモットーに、ケニアにおける日本企業のインクルーシブ(包括的)な事業展開を支援する「ソーシャルデザイングループ OSA」^(注3)として、一体的に活動している。



「ソーシャルデザイングループ OSA」立ち上げ(2012年・Mutisya(左)、Olango(右))

「ソーシャルデザイングループ OSA」は、その設立以来、日本とケニアのさまざまな職能のパートナーが共に働く柔軟な「プラットフォーム」として機能している。活動の詳細は次回以降に譲るとして、今回は私たちのボーダレスな活動を支える「組織」について述べてみたい。その根幹には、前川國男の組織論がある。

「MID 同人」の教え

前川國男は、自ら亡き後の「前川國男建築設計事務所」の後継組織として「MID 同人」を構想していた。前川の遺志に賛同するメンバー(MID 同人)が自分の組織で仕事をしつつ、プロジェクトごとに集まり、プロジェクトが終われば解散するという柔軟な輪郭を持つ組織だ。MID は、あくまで「同人」が同じ志のもとに集まる場であるから、株主に資本や方針を支配される「株式会社」という形態はふさわしくない^(注4)。

もともと、「株式会社」は、大航海時代にヨーロッパ列強諸国がアジア、アフリカを植民地化する過程で、資産家が出資し、利益を自らに還元する仕組みとして生まれた。「株主の利益最大化」は、株式会社が誕生とともに担

う宿命に他ならない。前川の中にはそうした「株式会社」への懐疑があったと思う。私が「OSA ジャパン」の形態として「一般社団法人」を選んだのも同様の理由だ。

さらに、OSA ジャパンとは別に存在する「ソーシャルデザイングループ OSA」(以下、OSA)は、まさに「MID 同人」のオマージュといってもよい組織だ。



プラットフォームとしての OSA

その特色は以下のとおり。

- OSA は、専門的な職能を有するメンバーがプロジェクトごとに同じ志の下に集まり、プロジェクトが終われば解散する柔軟なプラットフォーム
- OSA の活動は収益を優先しない
- メンバーは、自らの職能によって自らの生計を支えるために、OSA とは別の組織に属する
- メンバーの国籍、所属先の所在地は問わない
- OSA の活動について JICA 等の公的機関のプロポーザルに応募する場合は、一般社団法人 OSA ジャパンが応募主体となり、参加メンバーは所属先の許可のもと、OSA ジャパンとプロジェクト単位の有期雇用契約を結ぶ
- メンバーがプロジェクトで得た知見は自分の属する組織に持ち帰り、将来的な OSA との連携に活かす

次回以降、日本とケニアをまたぐ「ソーシャルデザイングループ OSA」の多様な活動について、その軌跡を追ってみたい。

〈注〉

- 1: 私のジョモ・ケニヤック農工大学時代については下記を参照されたい。
『ムチョラジ!—描きながら考えた僕のナイロビ12ヵ月』(求龍堂)
- 2: 「虹プロジェクト」については下記を参照されたい。
「虹プロジェクト」ホームページ: <http://osa-rainbow.com>
- 3: 「OSA」は「Olango and Sakata Associates」の略。
- 4: 「MID 同人構想」については下記を参照されたい。
『前川國男とその組織—受け継がれるもの』
(橋本功/前川建築設計事務所所長/「JIA News」2001年6月)
http://www.jia.or.jp/topics/planning/2001/06_01-02.htm

ドバイでのアクション



寺本健一

予測できない状況

2020年4月末の現在、ドバイでも段階的なロックダウンが実施されています。私たちの事務所も3月末より事務所を完全に閉じ、リモートワークに移行しました。先の見通しが定かではないプロジェクトもあり、心配が全くないわけではありません。けれども思い返すと、2012年にドバイに拠点を移したときも、新しい仕事があるのかないのか分からない状況でしたし、中東文化に関しても知らないことばかりでした。日々起こる予測できない出来事を、面白いと捉えることで、ここまで実践を積み重ねることができたのだと思います。

アラビア語に「インシャラー」という言葉があります。神の御心のままに、という訳になるのですが、私は「なるようにしかならない」という解釈をしています。ドバイでは、工期が守られることの方が珍しいし、支払いは大抵遅れます。また突然、事務所のキャパシティを超えるような大きな仕事が舞い込んできたりもします。コントロールしようと思ってもその通りいかないことも多く、常に寛容な態度が要求される環境です。余裕をもって樂觀的に経営を進めていくように心がけています。

マジリス

変化・流動が前提のベドウィン(アラブの遊牧民族)文化においては、何よりも知人との情報交換を大事にします。伝統的には、マジリスと呼ばれる応接間での顔を合わせた紹介が重視されてきました。一度出会って信頼した後は、実績の少ない若い人でも機会を与える文化です。私たちのプロジェクトのほとんどは、クライアント間の紹介によるものです。そのいくつかをご紹介します。

ドネーションによるモスク

UAEの一般的なモスクは個人名義の寄付金で建てられることが多く、予算に余裕がないケースがほとんどです。そのため安価で工事を請け負う施工者と仕事することになります。図面を正確に読み取ってもらえず、英語の通じないケースもあり、現場で壁にハンドスケッチして設計意図を伝えたこともありました。

アルワルカのモスクの礼拝室はトップライトからの自然光で満たされ、日中は人工光を必要としません。敬虔な信者は早朝から夜まで5回モスクを訪れますが、各時間帯に礼拝室の空間が異なった様相で信者を迎え入れています。

アルワルカのモスク
(撮影：堀田貞雄)

自前のゼネコン

規模の大きなヴィラの工事は、クライアントがコンストラクションマネージャーを雇い入れ、分離発注をしながら直営で進めていく場合が多くあります。これは自前でゼネコンをもってしまうようなもので、いわゆる普請道楽になり工期は長くなります。あるヴィラは8年経ってやっと上棟し、これから仕上げ工事が行われる予定です。いつ完成するか分からない「インシャラー」なプロジェクトです。

設計と工事の同時進行

75個のリサイクル海上コンテナを組み合わせて、ギャラリー・カフェ・ショップ・オフィスなどを含んだ多目的複合施設をデザインしました。伝統的なアラビックの都市構造を参照して、シッカ(路地)で結ばれたコートヤードが主体となるように各建物を配置しました。依頼を受けてから6ヵ月以内に工事を完了しなければなら

多目的複合施設
「ハイ d3」
(撮影：堀田貞雄)

かったので、設計開始と同時に基礎工事もスタートしました。当初、5年後に解体される予定と聞いていましたが、7年目の現在も活用されています。

オールスター

ドバイのスカイラインを一望する新しい人工島における計画で、100mの長さのプライベートビーチをもつ6,500㎡の敷地に延床2,500㎡のビーチヴィラをデザインしました。日本と関わりの深いビジネスを展開する資産家で、中東最大のアートコレクターの1人でもあるクライアントから、ゲストをもてなすためにサプライズのあるデザインを求められました。インテリアデザインは東京のスーパーポテトに、ランドスケープはシンガポールのサラダドレッシングに声をかけました。屋上に設けた日本庭園の作庭は京都の植彌加藤造園、ビーチガーデンには藤森照信さんに茶室のデザインと施工を依頼しました。地上階では外部のランドスケープを積極的に室内にまで持ち込み室内外を一体的に取り扱い、上階の全居室はすべて専用のテラスをもち、各々の眺望を確保しました。



ジュメイラのビーチヴィラ
(撮影：Darren Bradley)

民間資本による公共空間

ドバイクリーク沿いに、アートセンターとアートパークをデザインしました。ドバイは85%が外国籍の住民で構成される、文字通りグローバルな社会です。地縁的なコミュニティが醸成されにくい都市ですが、近年はアートを中心にしたコミュニティが活発になっています。アートを通したアクティビティによって新しい価値観を提供する場が求められました。鑑賞のためだけの権威的な美術館建築ではない、プラットフォームとしてのアートセンターです。アートパークと共に無料で利用でき、観光客も含めて、国籍・年齢を問わず、幅広い層の人たちが出会える場となりました。ドバイらしい、民間



「ジャミールアートセンター」と「ジャダファートパーク」
(撮影：Jeff Durkin)

資本による新しい公共空間がつくれたと思います。

同様に、サウジアラビアのジェッダにも、同国では初となる複合用途アートセンターをデザインし、今秋の竣工に向けて工事が進んでいます。

砂漠の国のウェットランド

2020年ヴェネチアビエンナーレ・UAE館のキュレーターにパートナーのワイル・アル・アワーと共に選出され、8月からの開催に向けてリサーチと展示のデザインをしています。砂漠のイメージのUAEですが、10のウェットランド(湿地帯)がラムサール条約に登録されています。そのウェットランドに見られる塩鉱物のリサーチから着想を得て、海水淡水化事業の廃棄物を再利用した新しいセメントの開発を行っています。

このセメントを用いた6,000ピースのプレキャストブロックをビエンナーレ会場で組み上げて展示する予定です。UAE内の2つの大学、日本の東京大学、米国ニューヨークのアーティスト、そしてEUイタリアの工事業者と協働しています。さまざまな国籍の人々と協働・共存する、UAEらしいチーム構成で準備を進めています。

アクション

ドバイに移り住み8年が経ちました。予測できない状況を好奇心で楽しみ、観察し、全力でデザインするというアクションの連続でした。ロックダウンが理由で、動きの少ない静かな1ヵ月を過ごすことができましたが、もうしばらく自宅に籠る必要がありそうです。ゆっくりと次のアクションを思い描いているところです。



自宅からの風景

寺本 健一 (てらもと けんいち)

waiwai

ファンディングパートナー・プリンシパルアーキテクト

1974年生まれ。2000年東京理科大学大学院修了。2000年ノイトリング・リーダイク(オランダ)。2002年CAAt(C+A Tokyo)。2012年ibda design 共同代表。2018年waiwaiに改名。ドバイ・東京を拠点とする。

高山 明 氏に聞く 観客の身体感覚や知覚を動かす 演劇のかたちを模索する

今回お話をうかがったのは、アーティストであり演出家の高山明さん。ドイツで演劇と出会い、現在は日本を拠点に都市を舞台にした作品を数多く手がけ、国内外で独自の演劇プロジェクトを展開しておられます。演劇に対する思いや、現在考えておられることをお話いただきました。



撮影：奥祐司

——演劇活動を始めたきっかけを教えてください。

ドイツの思想家ヴァルター・ベンヤミンなどを勉強したいと思い、22歳の時にドイツのフライブルク大学に留学しました。しかし、ドイツ語で学ぶことは想像以上に困難で、絶望感や孤独を感じていた時に、シュトゥットガルトでピーター・ブルックという演出家の「妻を帽子とまちがえた男」という舞台を見る機会がありました。その時、決して自分は舞台に没入していたわけではないのですが、とても集中していて、身体感覚や知覚が覚醒するような体験をしたのです。これに衝撃を受け、その晩、そのまま夜行列車に乗ってブルックの拠点であるパリに向かうことにしました。そうしたら偶然その日その舞台の最終日だったので、ブルックのカンパニーの俳優さんたちも同じ列車に乗っていたんです。パリ駅に着いて、その中の日本人俳優さんに話しかけ、それがきっかけとなり演劇を始めることになりました。それまで演劇なんて興味もなかったのですが、その時は絶望感や生活の厳しさもあり、すがるような気持ちだったのだと思います。

それから5年ほどドイツで舞台づくりをしていました。そのあと日本に帰って来ましたが、日本の方が演劇をするには状況が厳しくて、製本機械会社で働きながら戯曲などを書き、5年ほど細々と演劇活動をしていました。

2002年、33歳の時にPort B(ポルトビー)という創作ユニットを立ち上げ、それから数年は劇場で舞台作品をつくっていました。

——その後なぜ劇場ではなく都市を舞台にするようになったのですか。

ドイツにいる時は舞台をつくるのが楽しくて、舞台をどうつくるかが演劇だという発想になっていました。ところが日本に帰ってきて舞台すらなかなかつくることができない状況で、なぜ自分は演劇を始めたのか、少し距離をもって考えられるようになり、帰国から3年くらい経ったある時、自分の演劇の出発点は観客としての身体感覚や知覚だったということに気づいたのです。

そのことを、Port Bを立ち上げた数年後に改めて思い

出し、街が舞台で、1本の道を歩いた時に身体がどう感じ、知覚がどう変わるかというその体験が演劇になるのではないかと思い、都市に出ました。ですから、劇場から都市に出たというよりも、主役が舞台上の俳優から観客の身体・知覚になったということです。それが演劇の根本だと思ったのです。

——都市を舞台にした最初の作品はどのようなものだったのでしょうか。

僕らの稽古場が西巢鴨にあり、近くの巢鴨地藏通り商店街を舞台に、歩く身振りだけで作品をつくろうと考えました。その頃は時間もありましたから、バイノーラルマイクという人間の耳に近い条件で録れるマイクをつけて、地藏通り商店街をとにかく毎日歩いて録音し、その音源を聞き直すことを繰り返しました。そうすると、通り沿いの魚屋や八百屋の掛け声など環境音が録音されていて、自分の身体感覚や知覚を、その録音元を聞いてもらうだけで他の人に再体験してもらえる。音を使えば地図がなくても人をナビゲーションできるということに気が付きました。

そういうコンセプトでつくったのがツアー・パフォーマンス「一方通行路〜サルタヒコへの旅〜」(2006年)という作品で、半年くらいかけて約500回録音した環境音を編集し、観客が「音の地図」を聞きながら歩くというツアー形式のものでした。もちろんその途中で指示を入れたり、メリハリをつけるための装置も設けながら、普段見慣れているものが、どのようにすれば違った景色になるのかということに挑戦しました。

ブルックの舞台を見て始まった演劇が、ようやくそこにきてツアー・パフォーマンスという自分なりのスタイルで接続されたような気がしました。それからは舞台もつくりながら、同時に外にも出るようになりました。

——主役が観客の身体というのは面白い発想ですね。

ギリシャ時代が西洋演劇の始まりと言われていて、演劇はギリシャ語でテアトロン、英語だとシアターですが、

そもそも「テatron」は客席のことを指すのです。ですから、自分が個人的にやってきたことも演劇史の中で見るとそれほど外れではなかったと思っています。

ギリシャ時代の舞台作家たちは、将軍や今でいう官僚のようなポジションにある人で、戯曲はほぼギリシャ神話を題材にしていました。ギリシャ神話のある部分を解釈し直して舞台に乗せ、集まった市民はそれを見ながら街のことや国家のことを考えました。

数年前にアテネに行った時に、アクロポリスのディオニソス劇場を見に行きました。劇場は丘にあり、斜面が客席になっていて、観客の視線の先には小さな舞台、その後ろに街が見えます。観客は舞台を見ながら街も見ていたことが非常によくわかりました。テatronが客席を指していたように、劇場は観客が舞台を見ながら考える場とされていたのです。

そして当時そこに集められたのは市民全員ではなく、アテネ生まれの成人男性のみ、女性や未成年者や外国人や奴隷は排除されていました。アテネの古代劇場という少し神格化されていて、デモクラシーの発祥の場などと思われていますが、実は人を動員することと排除することが同時に行われていた場所だったのです。

劇場が暴力性と排除する機能を持っていたという点は、見逃してはいけないポイントだと思います。

— 演劇における暴力性とは具体的にどのようなことでしょうか。

「一方通行路」では、実は観客は非常に暴力的な体験をしていることになるんです。というのは、僕が体験したことやデザインしたことをそのまま反復させるわけですから。そこには、デザイン通りに動いてくれているという快楽があるし、動かされている方もデザイン通りに動くことに快楽をもつと僕は思っています。

ところがある時ウィーンでプレスカンファレンスをした際に、客席から「自分の身体感覚によって人の身体感覚をコントロールすることをどう考えているのか。その倫理や暴力性をどう考えているのか」と質問されました。その時に僕は答えられなかったのですが、それはとても重要な質問だなと思い、その後そのことをどうしても意識するようになりました。

振り付けすることへの躊躇もありますが、振り付けのようなフレームがないと実はただの生活になってしまっていて、普段の生活が異物として見えてきません。それは良くないので、振り付けや動線をデザインすることは暴力的なんですが、必要なことだと考えています。

ただ最近では以前よりデザインの仕方が強引ではなく



アテネのディオニソス劇場

なってきたり、デザインが100%機能しなくても構わないし、むしろそっちのほうが面白いと思うようになってきています。フレームや環境が決まっていれば、その環境がそこにいった人を振り付けてくれるからです。建築という広場のデザインに近いのかもしれない。

— 都市を舞台とした作品など、独自の展開をされていますが、ご自身の活動は演劇と捉えていますか。

外側から見たら僕が演劇をやっていると思う人はほとんどいないでしょう。実際、美術の仕事が多いですし、ここ10年で演劇の仕事がきたのは国内はほとんどなくて、2つくらいです。ですからアート活動をしていると思われるのですが、自分としては演劇をやっているという意識がとても強いです。

最初は作品を演劇として見てもらえないことを残念に感じていましたが、今はどう見られようが、どう体験されようが構わないと思っています。ですが、自分としてはつくる上でのベースは演劇だというのは常々意識していますし、それがないと遠くに行けないような、深く潜れないような気がしています。

— 演劇が行われる空間をつくるのは建築家です。建築家に何を期待しますか。

劇場の歴史についてお話しします。僕は近代演劇を完成させたのは音楽家のリヒャルト・ワーグナーだと思っています。それまで劇場はギリシャ時代のなごりがあり、舞台の奥に街を模した模型がつくられ、観客はそれを見ながら舞台を鑑賞していました。それをワーグナーは、自身の作品を上映するために設計したバイロイト祝祭劇場(1897年)で、舞台の奥を深くして、どの席からも同じ景色が見えるようにし、都市を完全に分断させました。そしてオーケストラピットを観客の視界に入らないよう地下に隠し、上演中は客席の電気を消すようにした。つまり舞台にひたすら没入させるようにしました。これが



「東京ヘテロトピア」より
(撮影：蓮沼昌宏)

近代演劇の完成で、この図式をうまく使ったのがナチスです。アドルフ・ヒトラーやヨーゼフ・ゲッベルス、アルベルト・シュペーアがワグナーに傾倒したのは、ファシズムが持つ論理とワグナーが完成させた論理が非常に相性がよかったから。極論を言うと、近代演劇が独裁者を構造的に支えてしまった歴史があると思います。

この近代演劇のスタイルが現代の劇場に適用されていて、今でも劇場では携帯電話の電源を切り、暗くなったら舞台上に集中してくださいというある種のルールがありますし、イベントや強度のある祝祭は一極集中がベースになっています。

ですから、この歴史に対して、これから劇場やイベント会場、あるいは都市の中の祝祭のデザインがどうあるべきかはとても重要なことだと思います。建築物は時間をかけて人の身体感覚を変容させることができます。これまでとは違う、われわれが思う存分楽しめる新しい演劇スタイルがあった時に、どういう建築が必要なのか。どういう建築をつくれば、人々のファシズム的な欲求が攪乱されたり、解体されたりするのか。プロジェクトの演出側と建築家がタッグを組み、新しい知覚のモデルになる劇場や広場をデザインしていただきたいと思います。

——新型コロナウイルスの蔓延がご自身の活動にも大きく影響しているのではないのでしょうか。

建築倉庫ミュージアムで、2月から「模型都市東京」という企画展を開催していますが、休館している状況です。海外でも展覧会などに出展を予定していましたが、延期になったり、この先予定しているものも開催されるかわかりません。

このような状況だからこそ、今取り組みたいと思っていることが3つあります。ひとつは、演劇的な思考や発想が他の分野の人にも有効に生かしてもらえるように、きちんと文章にしたい。2つ目は、コロナの時代でもできる演劇のかたちを探したい。3つ目は、継続的な都市の機能として存在しうるようなものを、とくに東京で模索したい。

その時にヒントになるのが、繰り返しになりますが、

ギリシャの劇場では舞台を見ながら街のことを考えていたということ。ただそこでネックになるのが、コロナで問題になる、人が集まるということだと思います。もちろん時代とともに集まり方が変容することを受け入れ、そのための新しい形式を発明していかなければいけません。街のことを考えるメディアが舞台であると定義するならば、今の時代、劇場に集まらなくても、アプリやWebサイトでもいいのかもしれませんが、しかし、人が物理的に集まることの意味は何か、そこには古代から何千年も築いてきたものがありますから、それはやはり大事で、「濃厚接触」の価値を捨てたくはないという気持ちもあります。

——それは人が集まる場を設計する建築家に突きつけられた課題でもあります。

僕の作品に、「東京ヘテロトピア」など、都市の中で参加者を移動させることがテーマのプロジェクトがありますが、それはコロナによる影響を大きく受けることになります。移動できない時にどうすればいいのかは、実は演劇を考える上でとても大事なテーマだと思っています。それはもしかしたら建築にも通じることかもしれません。

民俗学者の折口信夫曰く、演劇の起源は田楽で、田楽は宗教行事の田遊びを真似たもの。田遊びに行けない人たちが、田楽のパフォーマンスをする人たちを自分の町に呼ぶようになったといいます。富士山に行けない人が近所の神社に富士山を模したものをつくって疑似体験したというのもそうですが、日本の芸能や演劇は、ほとんどオリジナルの場所でサイトスペシフィックなものを体験できない人のためにつくられている。基本的にそういう時に生まれているのです。ですから、新型コロナウイルスが蔓延して移動できない今こそ、何か考えなくてはいけないと思っています。

——これからの演劇・建築のことも含めて大変貴重なお話をいただき、ありがとうございました。

インタビュー：2020年4月2日 Skypeで実施
聞き手：会田友朗・関本竜太(『Bulletin』編集WG)

PROFILE

高山 明 (たかやま あきら)

演出家

1969年さいたま市生まれ。演出家・アーティスト。演劇ユニットPortB(ポルト・ビー)主宰。既存の演劇の枠組を超え、現実の都市に介入するプロジェクトを世界各地で展開している。近年では、美術、文学、観光、建築、教育といった異分野とのコラボレーションに活動の領域を拡げ、演劇的発想を観光や都市プロジェクト、教育事業やメディア開発などに応用する取り組みを行っている。

オンデザインの実験



西田 司

すごいタイミングで寄稿の依頼をもらったものだ。建築のはじまりかたを紹介する時に、オンデザインのウリは、大きな模型や、思考のプロセスを紹介するブックレット、そしてプレゼンまでの複数回の対面コミュニケーションであるが、いまのコロナの影響ですべてできなくなってしまった。

大きな模型はモデリングとCG検討にかたちを変え、ブックレットは動画のなものに変化を余儀なくされている。対面コミュニケーションはすべてオンライン会議になった。

模型であれば、全体と部分の両方を一瞬で把握できていたものが、モデリングでの打ち合わせになると、その部分にフォーカスした説明や意見交換になるし、プロセスも大事だけれど、もっとフィジカルに体験的な部分や土地の変遷などを伝えたいと思うと、ブックレットではなく、動画のなものになっていく。

普段の対面打ち合わせは、相手の目線や、家族の会話などから、要望の重み付けや言いづらいくれど心では感じていることなどを察することもあるが、オンラインの打ち合わせだとすべてがフラットに聞こえて、なかなか悩ましい……。

とは言っても、コロナは明日突然無くならないし、プレゼンの方法や、仕事の始まり方は、変わらざるを得ない。そして、その後の世界がすべて元通りかというところ、それも少し違うかもしれないと思うと、ここでシフトして経験したプレゼンテーションやコミュニケーションのツールや手法は、ぜひともハイブリッドして今後に活かしたいと思う。

頭ではわかっているけど、自分が得意だと思うことを手放して新しいことをするのは結構ストレスだ。新しいことはほぼゼロベースで始まるから、いきなりビギナーである。これまでも、手描きからCADに移行した時や、建築とまちづくりを並走させ始めた時など、同じような経験をしている。手描きが上手い人ほどCADに移行するのをためらうし、建築の設計経験が多ければ多いほど、まちづくりは門外漢だという空気をまとう。どちらも

やってみれば、両方できた方がいいよね、という類の話だが、新たに始めるときに必ずある、上手くいっているのか上手くいっていないのかさえもわからない、地味な筋トレのような時期が難所で挫折しそうになる。

いま僕は、事務所の若手にも付き合ってもらい、動画編集を夜な夜なやっている。オンラインのコミュニケーションで、自分が伝えたいことをPDFやパワポで伝えることを限界に思い、動画を使えるようになろうと始めてみたが、体力的、能力的にギリギリを感じている（若手はデジタルネイティブなので、どんどん上手くなるし、少しくらい無理しても翌日働けるが、僕は翌日は終日眼が痛い……）。

オンラインの会議も、非常事態宣言後、毎日6時間ほどやると、コツを掴み始めて（言葉にするのが難しいが、会議室で人対人でやっているのではなく、相手の空間と自分の空間が接続してると思えるようになり、相手に配慮できるようになってきて）から、プレゼンや打ち合わせもそんなにストレスではなくなってきた。

そう、思い返してみると、大きな模型もプレゼンのブックレットも、対面コミュニケーションのコツも、始めの頃は手探りだったと思う。建築は、出来上がれば実際に体験できるけど、仕事の始まりは、いつも実際のモノはない（という宿命だ）。そんな時に、施主がどうやって歩き始めるかといえば、出来上がりの空間を描く側の創造力や妄想力に巻き込まれていくからだと思う。それを表象するのが今までは模型であり、プレゼンのブックレットであり、対面コミュニケーションだった。ただ僕自身、（破れかぶれな気持ちも多いが）最近、発見や新しい価値に自分が揺さぶられることを楽しんでいる。その時々でフィードバックし言語化し、そこでしか生まれない建築を探求するプロセスは、とても学びが多い。

こんな時でも思うことは、建築は、常にどんな状況でも、ひらかれている。それは出来上がった建物だけではない。建築の楽しさを考えたり設計したりすることの価値を、一人ひとりが自分のこととして向き合う楽しさを、僕たちは、日々模索している。

言葉



小川真樹

若い頃に耳にした、たったひとこと言葉が、その人の内に沈着することがある。まるで心の奥に引っ掛かった魚の小骨のように、いつも気になり、生涯無くなることはない。私にはそれが2つある。

脚本家だった私の父は、何人かの若いお弟子さんたちを替わるがわる自分の書斎横の小部屋に寝泊まりさせ、共同でテレビドラマのホン(脚本)を書いていた。彼らの会話は家中に筒抜けで、子ども心に、親父はいつか殺されるのではないか、と思うほどの厳しい言葉を聞かされていたのだが、あるとき父がこんなことを言ったのだ。「おまえはホンのことばかり考えているから駄目なんだ。他の仕事を経験して出直して来い」と。それは、次に何が起るか身構えるほど恐ろしく、苛酷な言葉だった。

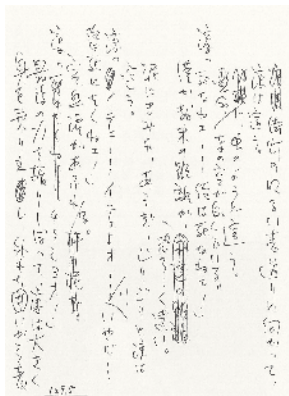
それから10年、藝大大学院時代に「樹形の構成原理と環境への対応」という研究をご一緒させていただいた恩師、奥村昭雄先生から、酒飲み話で忘れがたい言葉を聞いた。「でもね、本つてのは読まない方がいいんだよ。読むとそれで分かったような気になるでしょ？ そうすると自分で考えなくなるんだよ」というのだ。これは先達の言葉を聞くなともとれ、このシリーズのテーマ「温故知新」とは逆に思えるけれど、私にとっては、これが「温故」にほかならない魅力的な言葉だった。

引っ掛かった小骨をなんとかしたい私は、なかば否応なくこの2つの言葉を「いつも同じ土俵の中に居ては良いものはできない」、「既成の言説を鵜呑みにせず自ら考えよ」と、自分に分かりやすく翻訳した。その結果

は、見方によっては何かに徹しきれない建築家が出来上がり、設計の得意分野はもとより、スタイルも定まらず、大学の講師としても、建築設計だけではなく専門外の「生物に学ぶデザイン」などまで担当するありさまとなった。それに満足はしていないが、後悔もしていない。

得意分野が無いと書きながら、最近の私はたまたま「お寺」の仕事が多い。もちろん専門ではなく50代になって初めてやらせてもらった用途なのだが、おもしろいことに寺院建築には決まり事が予想外に少なかった。つまり自由なのだ。歴史上の仏教建築には時代ごとの「型」があるが、それらに倣えとは誰も言わない。大切にすべきなのは型ではなく、その時代に現われる解釈なのだろうと思った。解釈であれば自分で考えねばならず、その根拠を先達に求めるのは筋違いとなる。たまたま出会った「お寺の仕事」が、何かを教えてくれたような気がしている。

もちろん、先人の素晴らしい仕事には日々打ちのめされ、そこから学ぶべきことは、ひとりの人間の一生には収まらないほど多いとも思っている。と同時に、我々が社会から求められることは急激に変化しており、従来の職業観の内に居てはいけないと多くの建築家が感じているだろう。これほどまでに根底から自分で考えることが求められる時代は無かったかもしれないが、仕事や建築教育の場で若い人たちに接するとき、彼らが敏感にそれを捉えていると感ずることがある。その、まだ弱い知新の萌芽とともに考えていきたいと、今の私は思っている。



父の原稿「13日金曜日マカロニ死す」



奥村先生の黒松の形態変化スケッチ



私の近作「増上寺塔頭・宝珠院」の賑わい

抱負を語る

働く場としての 医療福祉建築

山田明子



医療・福祉施設の設計に携わっている。特に大切にしているのは、治療・療養・生活する患者さんにとって快適な環境とは何かを問い続けること。モノ言えぬクライアントの声を聴くこと。「5日間の入院」と聞けば短いと感じるかもしれないが、自分に置き換えると自宅から出られなくなったら1日でも長いと実感するに違いない。不安を少しでも和らげ穏やかに過ごせる、自分らしい生き方が実現できる、スタッフを身近に感じられ安心感の持てる空間、そういった視点が重要と考えている。

私たちの仕事、モノづくりに関わるどちらかという前向きな仕事と対比すると、医療や福祉に従事する方々の献身的な姿勢にはいつも頭が下がる。新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、医療従事者の活躍や苦悩、そして疲弊が毎日伝わってくる。高齢者や障がい者のケアをする方々も神経を尖らせる日々が続いているに違いない。

「働き方改革」が推進される中、医療や福祉に携わる方たちの職場環境も当然十分に配慮しなければならない。気持ちのよい休憩室や充実したスタッフ食堂は必要だが、もっと重要なことがあると思っている。

医療施設では助からない命もたくさんある中、ご家族に懸命に尽くしてくれてありがとうと言われたり、終の住処として施設に暮らす高齢者の方からここで最期を迎えられよかったと感謝を告げられることは、働く方の苦勞が報われ喜びを感じられる瞬間なのではないかと想像できる。結局、患者さんや入居者・利用者の声にはならない声にどれだけ耳を傾け、想像力を働かせ、その人らしく過ごせる空間をつくることができるか、これが働く方のやりがいや充実感に影響してくるのではないか。今この状況の中、医療・福祉建築のあり方を改めて考える機会を与えられているように感じる。



長野県立こころの医療センター
駒ヶ根

抱負を語る

私の建築家像

うねもりひろゆき
畝森泰行



この度、JIAに入会しました。建築家として自分の事務所を開設して約10年になります。この10年、独立する頃には想像もできなかったほど、自分も含め建築家の仕事は幅広くなったように感じます。リノベーションが圧倒的に増え、建物を設計する以外にも、事業計画やまちづくりに広がるプロジェクトが多く見られるようになりました。例えば、住宅もシェアハウスや家開きなど、これまでの住まいを越えた使われ方が生まれています。機能も複合化し、お年寄りや子どもたち、子育て世代や障がい者など、さまざまな人に向けた建築も求められてきました。そのため、僕自身も協働で設計する機会が増え、同世代の建築家や組織設計事務所、また異なる分野の専門家など、出自や立場の異なる人たちと一緒に設計することが多くなりました。これらの変化は、かつて近代建築が想定したものとは異なり、いかに社会が複雑で多様化しているかを表していると思います。

さまざまなプロジェクトや協働を通じて、建築家とは何だろうと考えることがあります。新しくつくること自体が問われ、また情報化が加速し、環境への配慮と持続性が求められるこれからの時代に、建築家は何をつくり、何を示すのか。ひとつに定義することは難しいけれど、少なくとも自分の建築家像とは何かを10年経ってようやく考えるようになりました。JIAの入会を機に、たくさんの方の話を学ばせていただき、少しずつでもその輪郭をもたせていければと思います。



須賀川市民交流センター tette

NPO日本デザイン協会(JDA) セミナー

「イタリアン・セオリー」から読めること(前編)

2019年2月26日にJIA館にて開催されたセミナーの記録を4回に分けて掲載します。

登壇者：神田順(東大名誉教授)、山本想太郎(日本建築家協会デザイン部会長)、

連健夫(日本建築まちづくり適正支援機構代表理事)、大倉富美雄(進行)

共催：(公社)日本建築家協会(JIA) 関東甲信越支部デザイン部会

NPO日本デザイン協会理事長

元デザイン部会長

大倉富美雄

言葉や数字の判断を超えた表現領域を誰が保証するのか
才能あるフリーランスを格差社会化から救うには

新型コロナウイルス感染拡大で緊急事態宣言が出たこと、しかも、ここで話題のイタリアがこれほど被害を受けるとは、このセミナー開催時には思いもつかなかった。

「イタリアン・セオリー」という言葉は、英語圏で「フレンチ・セオリー」に代わって台頭してきた、という言い方があったことを捉えて、岡田温司氏(京都大学教授)が著書とした(2014年)概念である。

本セミナーは、それに影響を受けたという神田順氏(元東京大学教授)を招いて、「イタリアン・セオリー」を核に日本の現状を考えようとしたものだ。神田氏は、現行の国の定める建築基準法の上をいく建築基本法(仮)を創ろうと活動されてきた、社会活動家でもある。

ここで言う「イタリア」は、その文化を背景にしつつも、いわゆる観光案内的な話ではない。しかし、観光大国として異人種の受け入れにも寛大な国が、ウイルスの被害をヨーロッパで真っ先に受け、拡散を止められなかった理由を、この国特有の「開放感」のようなものに結び付ける気はないが、どこか深淵での繋がりはありそうだ。

そもそも、「イタリアン・セオリー」という、在伊10年の経験者である私からしても、言葉で表現することが難しい感性的・倫理的な世界観は、単にイタリア人だけのものではなく、人類全体が個人のバランス感覚で判断していく問題に転化していくように思える。

このセミナーのテーマは、このように抽象性もあるため、4人の登壇者のそれぞれの想いや経験から語る内容には、主題の統合への一貫性が無いように感じられるかもしれない。それは「イタリアン・セオリー」が醸し出す問題(前論)と、「日本の規制社会(特に建築界を例に)」問題(後論)との乖離感にも関わるだろう。

前論には、哲学的にナチス時代の戦争体験から尾を引く欧米の思想史に加え、「貧」を讃える宗教上の死生観への想いが加わっており、一概に日本人に体感するのは難しい面も感じられる。岡田教授が言うように、「イタリアン・セオリー」が、それまでの哲学の主流だった「『主体』

や『真理』といった観念的で抽象的な問題よりも、生や歴史の、現実的で具体的な問題(個人の自由と規律、権力の対応など)に関心が向けられてきた」という視点が重要になりそうだ。それは、いわゆる近代主義への批判にも通じている。そしてその、「貫った近代主義」の残滓から抜け出せないのが日本(人)なのかもしれない。

「生の現実」で繋がる日本の問題

それを承知で、後論で現代日本の社会問題として、前論の核心を活用すればよいのだろうが、登壇者各人の関心の力点は異なっている。例えば建築法規の認識について、この国の「規制」をあえて造語風に言えば、変えられる〈技術知〉法と見るか、簡単には動かせない〈慣習知〉法に根を持つと見るか、という価値比重の差になっても現れてくるように。それでも、実感としての我々の人生や、その生を助けるための法整備を考える時、「イタリアン・セオリー」のもたらす「生の現実」性や資本主義に欠ける倫理観が、ここで繋がってくるのではないだろうか。

本稿は今回から分割して掲載されるので、先に登壇者の発言を簡単に紹介して、全体の進行を示しておきたい。

はじめに、神田順氏が日本の設計環境に潜む問題(真の専門家軽視)を言及し、そこから「イタリアン・セオリー」を紹介する。次に、山本想太郎氏から社会構造として変えることはできない「選ぶ者」と「選ばれる者」への言及があり、現行の建築基準法はそれほど悪くない、とする立場を示す。3人目の^{むらじ}連健夫氏は、イギリスでの経験を含めて、実際に設計環境を変えていく立場として具体例を紹介する。最後にまとめとして、日本に深く根付いた、「上が指示し、下が追従する」体制に順応する現状に至った経過を大倉が語る。

1回のセミナーとしては重く広範であるが、AI指向社会に向かう一方、改めて人間存在の根本を問われる今の時代に、忘れられがちで根源に戻りにくい、この国の設計環境の本質問題が語られている。日本社会全体をも俯瞰する良い参考資料になることを期待したい。

(大倉富美雄)

「イタリアン・セオリー」から読めること

神田 順（東京大学名誉教授）

何でも数値と金で決める、この国の仕組みはおかしい

「イタリアン・セオリー」に出合ったのは、2003年発足の建築基本法制定準備会で、法律を議論していた時でした。建築基準法というのは基本的に規制法になっていますが、そもそも法律は何のためにあるのか。例えば、24時間、機械換気をすることが最低基準として規定されていますが、法律で高気密・高断熱住宅が義務付けられるとなると、それは人間の生き方を決めることになる。法律がそういうことを決めるとはどういうことかと、準備会を立ち上げた後ずっと思ってきたのですが、『イタリアン・セオリー』を読み、現代の国が定める法律の意味がわかった気がしたのです。

セミナータイトルにある「規制社会と知的生産」を語っていると「イタリアン・セオリー」の話になると思いますので、最初にいくつか具体的に紹介します。

最初は仙田満先生の「知的生産者の公共調達に関わる法整備の動き」の記録です。「金で判断する設計入札は、何としてもおかしい」と、建築学会も提案はしたけれど現実是不変。特に、公共建築や公共事業に関しては、会計法があり、なるべく安いものを採用するように国が決められています。それは建築だけでなく、いろいろな分野で金銭で決める流れがあり、これに対して、学術会議でも「公共調達」として、知的生産者の選定のための法整備を求めてきました。

これは、逆に金銭の多寡で判断しないと、中身の判断が必要で、それでできるのかとの指摘もされてきました。これには公開・非公開の問題や、行政が選ぶので誰を指名するのか決まっていたりすると金銭の多寡よりも別の問題が出てくるのですが、こういう動きがあるということ。これはまさに規制社会と知的生産の話で、社会的な仕組みとしてはうまくいっていない例です。

次に「建築基準法における法規制の問題」ですが、構造を専門とする自分の意識としては、建物の安全性については、専門家が自分の知識と知恵で評価すべきであって、法律にどのくらい適合しているか等では判断できないと思っていました。しかし、それまでの（旧）法規は、最低基準を謳っておきながら「構造物は雪、風、地震に対して安全でなければならない。それは構造計算で確かめることができる」というのが主文だったのが、1998年



セミナーの様子

の基準法改正は、性能規定化という言葉に沿うものの、性能自体を専門家に委ねるのでなく、「国の定める計算方法、決めた基準で確かめたものを安全と見なす」となったのです。逆に言うと、国が認めた基準で計算しないものは安全と見なさないというわけです。あまりにもおかしいのですが、多くの専門家が声を上げてても、法律は変わらないのが現状です。

構造家として、単体規定のところで質をどうするのか、言葉、式ですべてを規定するのは無理だと思っています。集団規定の方は、規制側が何を狙うといえ、自由主義経済の中での規制緩和、つまり経済の活性化です。いちばん便利なものとして容積率を大きくする流れがあり、これにより街の景観ががた落ちしている現状があるのです。

こういう中で建築の専門家が、将来の建築の望ましいあり方について発言をしても、容積率が800%や1000%になるというところでは非常に無力になる。これは経済原理の横暴でしょうが、こういう中で建築家は、経済原理に迎合するのではなく、法律を変えることで本来の活動ができるようにしていかなければならないと思います。

巨大企業支援の体制がもたらす社会のゆがみ

岡田温司さんの書いた『イタリアン・セオリー』について私なりに解説させていただきます。

『イタリアン・セオリー』で扱う、ネグリ、アガンベン、エスポジトは、80代、70代、60代と10歳くらいずつ年齢差のあるイタリアの哲学者です。それぞれの時代背景のもとで自分の思考を整理して哲学ができていた人たちだと思いますし、活躍の場もイタリア国内だけでなく、アメリカでもあり、それらの視点から彼らが新しい哲学の場を開いています。

特に今の資本主義、市場経済の中で社会が動いていることに関しては、まずネグリが書いた『帝国』で、我々が一般に考えていた帝国主義のこととは少し違い、もっと広い視野を描いています。市場経済の中で、巨大企業には実に巧妙に各原理が応用され、動いてきている。特に戦後、グローバルなスケールになってきており、小さ

(注1) 建築基本法の制定を目指し、任意団体として発足。4月に『持続可能社会と地域創生のための建築基本法制定』（A-Forum出版）を発刊。
(注2) 彼らは必ずしもイタリア在住者とは限らない。発表年代による時代感覚の差はわずかでも、ここに至るまでの時代背景は意識しておく必要がある。例えば、ネグリの『帝国』初版発刊は1995年（平成7年）。阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件のあった年。

「イタリアン・セオリー」が扱う3人のイタリア人思想家・哲学者と、そのキーワード

アントニオ・ネグリ	『帝国』2003年 (マルチチュード、生政治(1)、グローバル市場経済)
ジョルジョ・アガンベン	『ホモ・サケル』2007年 (生政治(2)、宗教の世俗化・法の押しつけ)
ロベルト・エスポジト	『近代政治の脱構築』2009年 (生政治(3))

※生政治は、3人が違った意識で問題にしている。

な企業は太刀打ちできない状態なのですが、それを上手く扱っています。

つまり、微妙に独占を許しながら大きくしていく仕組みがあって、お金を増やしていくことが巧妙になってきている。直接、国が戦争で侵略しなくても、国と国の経済競争に企業関わって来たり、巨大企業を国が保護するなど、経済的に侵略できてしまう。経済活性化は誰でも評価するが、格差は拡大していく。独占禁止法がありながら、国は自ら例外を作って微妙に独占を許していく。お金の扱い方、法律のルールがなかなか巧妙になってきているのです。最近では中国のアフリカ進出の例もあります。『帝国』は、このことをうまく書いています。

市場経済が、すなわち「宗教」である

ファーマーの『文明』でも、プロテスタントの勤勉さがアメリカ合衆国をつくり、資本、科学、医学が結びついて発展し、現在まで続いているとしています。フランスにもデリダやフーコーがいて、それらを踏まえてイタリアの哲学者たちは語っていると思いました。

岡田さんが中心に挙げているのがアガンベンの『ホモ・サケル』で、その意味は「聖なる人」で、「魔女」をキーワードとして使っています。「魔女」には、人を殺しても死刑にならないが、人間としては見なされないという概念があり、現代の宗教活動もこれに例えています。

宗教改革時には、カトリックの腐敗をプロテスタントが解放し、日本でも明治になって神仏統合令などが進みました。それまで宗教が人の支えとなってきたのはわかりますが、現在は宗教も市場経済の中でなければ生き残れません。市場に歯向かうものは、例えばどんなに優れた芸術家でも滅ぼされるし、あるいはどこかに隠れてしか仕事ができない。それに乗じて、「市場経済が宗教に」なっているのです。そのことをアガンベンは書いています。宗教に対して「違う」、「経済活性化に対して違う」と言うと「お前は異端者だ」となるのです。

法律や体制が生き方を決めている

エスポジトの『近代政治の脱構築』も難しいのですが、

「法律が生き方を決めている。それでいいのだろうか」という問題を投げかけています。

日本は第二次世界大戦をきちんと乗り越えていないところがあるのですが、ドイツはナチスの存在を大きな失敗として学習し深く反省し、その後の社会の形成を考えてきました。それが「イタリアン・セオリー」に引き継がれています。ここに見えるいろいろな見方が、社会の「ゆがみ」や「矛盾点」を解決するきっかけとなり、「イタリアン・セオリーから学ぶもの」という今回のテーマに繋がればと思っています。

ネグリは東日本大震災の後、日本に来て講演したのですが、「あれだけの事故があって、まだ原発をやるの?」と言っているのです。きちんと考えることが必要なんだと思いました。日本はあれだけの事故があったのに、何も考えていないように思います。

アガンベンのところで「宗教の世俗化」の話をしましたが、ネグリのところでは「マルチチュード」という言葉がよく出てきます。マルクス主義としての中国、ソ連の時代は人民と資本家との対比だったので、人々を一括りにしてしまいましたが、「マルチチュード」は人と人の集合体のことで、そこに人の生活や生き方がある。それが大事ですし、どうやって政治がそれを運営できるかだと思います。現実にはグローバルな市場経済がお金の世界では力を持っていて、大きく廻している中で、問題はしたら人が気持ちよく生活できるかだと思うのです。

「合意形成による力」と、「既成権力の無理な押しつけ」^{注3}

アガンベンの『ホモ・サケル』を読んだのですが、ポイントは、constituting powerとconstituted powerの対比です。Constitutionは「憲法」のことですが、constituting powerは、仕組みや法律はこうあるべきと提案することであり(編注:つまり「合意形成による力」、専門家が専門の分野でどう社会や制度を良くしようかと力を出し合って助けていくことです)。

constituted powerは、国や自治体は憲法や法律の枠内で権力が与えられているわけですから、人々は、権力側から規制を受けることを言います(編注:つまり「既成権力の無理な押しつけ」)。

しかし、いつまでも与えられ、そこにばかり権力が集まるだけでは、本来の社会の仕組みや価値基準が、人々のためというより、わかりやすい市場価値や貨幣価値に流れやすい。価値を評価できる人がきちんと評価しないと、ますます価値は認められないと思います。

(次号に続く)

(注3) 個人の生き方を限定する法律や体制が進む中、どうしたら個人を活かし、一方の規制権力をコントロールできるかという課題が大きくなる。宗教の世俗化を語るアガンベンだが、そこに生じた宗教の締め付けが、転じて市場経済の活性化がもたらす締め付け(=既成権力)に変わると受け取られ、それを形成する法規制への疑問を投げかける。

平和通り商店街アーケード 老朽化問題に関わり感じたこと



沖縄支部・
まちづくり委員
下地鉄郎

2017年、沖縄県那覇市国際通りに繋がる全長約360mの「平和通り商店街アーケード」の老朽化現状について関係者から相談を受け、那覇市より業務委託を受けたまちづくりコンサルと連携する形で、沖縄県建築士会まちづくり委員会とも協力し、その課題解決のお手伝いとして約1年関わった。相談を受けたきっかけは、那覇市内での築古の空き家改修や、別地域でのアーケード沿い商業ビル（検査済証無し）再生実績等があったためだと思う。

平和館という名の映画館があったことから名付けられたという「平和通り（市道）」にアーケードが設置されたのは昭和56年。2017年時点でのアーケード沿いの店舗数は約180（うち組合店舗約120）店、側面建物数は90棟にも及ぶ。戦後の闇市から続く那覇のシンボルであり、また大きな観光文化資源ともいえ、県民の関心も高く、意見交換会などのワークショップの模様や抱えている課題について何度も新聞等で取り上げられた。

- アーケード実測・老朽化調査・同種事例調査
- 指導課や消防等へのヒアリング
- 通り会へのヒアリング
- 土地所有者・建物所有者・店子等へのヒアリング
- 維持費、撤去費、建替え費等の概算見積もり
- 予算や工期などを含めた課題整理表を中立的立場で作成
- ワークショップなどでのアンケートを踏まえてのそれぞれのパターンでの提案

事業の大きな目的は、組合を中心とした商店街関係者が主体的になり未来志向のビジョンをつくり上げることであることから、関係者への事前調整などにも気を使ったのを記憶している。

商店街関係者・行政側・市民それぞれの意見

多くの商店街関係者にとってのアーケードの存在は日常的な風景でもあるため、初期のヒアリングのなかでは、そのままの現状でいいのではないかという意見が目立った。火災時の消火活動などの防災面に影響を与える老朽化の問題は、かねてより関係者の間では議題になることはあったが、商店街側としては「アーケードのある通りは市道でもあることから、できれば市の管理でなんとかし

てもらえるかも」という期待もあったのではないかと思います。

一方、安全面で不安のあるアーケードを、行政側が全面的に撤去しようとしているのではないかという余計な疑念や誤解も一部あったように記憶している。ただ、行政関係者へのヒアリングも重ねるなかで、市側としても当然撤去ありきではなく、（一枚岩ではないが）老朽化問題の解決には商店街側で主体的に取り組んでももらいたい気持ちが強い。その気持ちが事業予算化の背景でもある。

事業は業務委託通りに進み、関係者の多さによる告知不足や意見の不一致を若干残しながらも、最終的には組合の主要メンバーが主体になり、前向きで選択性のあるビジョンにはたどり着けたのではないかと思います。とはいえ、その後も根本的な予算的な解決と継続的な解決案見直しを続けていく必要がある。組合の主要メンバーのひとりが「ようやくスタート地点に立つことができた」と話されていたことが印象的であり、通りと共に生きてきた覚悟を感じた。

まちの建築家という立場でできること

関わる建築家の経験や技術によっても関わり方は異なってくると思うが、まちづくりの場面では、本事業のように商店街当事者・行政・市民それぞれの異なる意見を吸収した上で、どちらにも寄りかからずに責任を伴う意見を積極的に出していくプロ意識や行動が重要であると実感した。特に、空間像を的確なタイミングで提示していける建築家の特定技能を武器に、まちづくりの場面において「建築関係に詳しいボランティア」ではなく、まちづくりの進展にとって必要不可欠な専門家として認知してもらおう努力を地道に続けていきたい。



アーケードおよび側面建築物の課題整理（建築物からの視点）

NPO 法人建築家教育推進機構を ご存知ですか



NPO 法人建築家
教育推進機構 理事
清水裕子

1. NPO 法人建築家教育推進機構とは

特定非営利活動法人建築家教育推進機構（以下NPO 法人建築家教育推進機構）をご存知でしょうか。JIA ホームページや、JIA 機関誌の広告でたまに目にされたことがあるかもしれませんが、NPO 法人建築家教育推進機構は JIA の会員も理事、委員となり活動している団体です。歴代の JIA 会長は副理事長を務められています。JIA の連携組織構成の中で俯瞰して見ると、下記図の位置付けです。

NPO 法人建築家教育推進機構は建築家の教育を目的に、2008 年に JIA と日建学院が共同で設立した NPO 法人で、一級建築士定期講習テキストを主体的に編著しています。

JIA 会員が「NPO 法人建築家教育推進機構／日建学院」が主催する一級建築士定期講習を受けた場合、受講料の 25% が NPO 法人建築家教育推進機構に支払われる流れとなっています。会員のみでなく、会員が主宰する事務所で働く非会員の所員が受講した場合も同じ金額が支払われます（申し込みの際は JIA の会員または所員の欄にチェックを入れてください）。現在、この 25% の協力金を JIA 会員である次のプログラム主催者に助成金として提供しています。

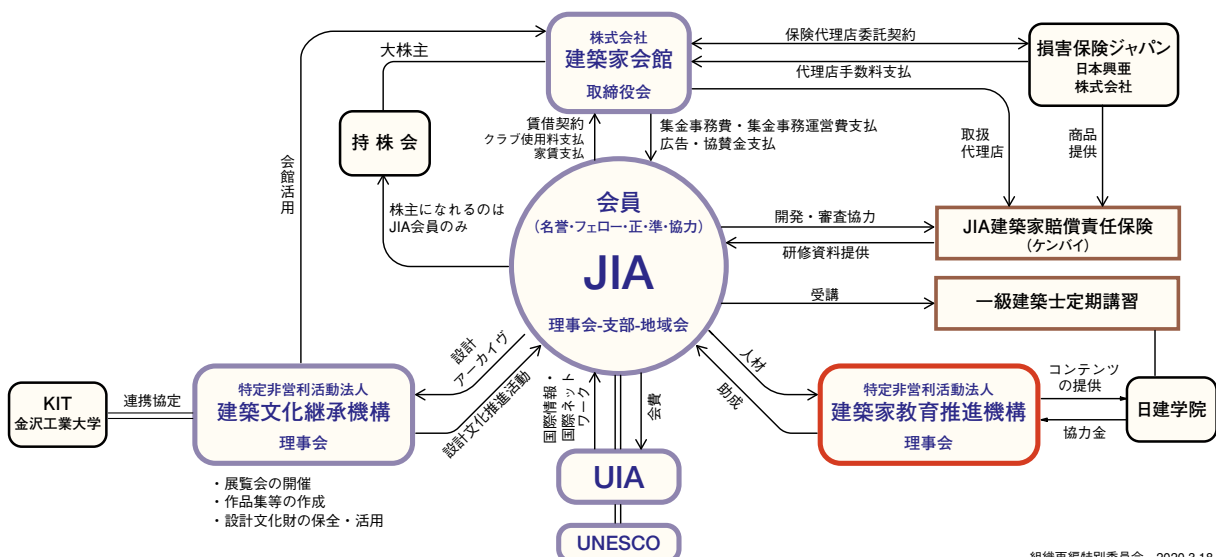
●助成金対象プログラム

- A. セミナー・講演会の開催
- B. 出版物作成
- C. 見学会・イベント開催

JIA 会員であれば、どなたでも助成金の申請をすることができますが、この制度をご存知の会員は少なく、申請は 1 年に 10 件程度となっています。助成金の額は現在、5 万円となっており、教育イベントの実施費をすべて賄える金額ではありませんが、教育活動へのインセンティブになればと考えています。JIA 会員の教育活動を活発にすることが第一の目的です。

2. 問題解決と特別研究会

上記のような活動を行っている NPO 法人建築家教育推進機構ですが、その存在は周知されておらず、JIA 会員の定期講習受講率は高くありません。近年の数字で見ると、3,554 名の正会員中、1,423 名（3 年間の合計）の受講に留まっています（2020 年 3 月時点）。ただし、会員が主宰する事務所で働く非会員の所員の受講は 541 名となっており、合わせて 1,964 名が受講されています。多くの会員とその所員が受講すれば、収入源が増え、助



組織再編特別委員会 2020.3.18

公益社団法人日本建築家協会 (JIA) 連携組織説明図

成金の額を増やすことができます。助成金申請も広くは周知されていないため、多くの会員に還元できていない状況です。

そのような状況の中、NPO法人建築家教育推進機構を立ち上げた理事からの提案で、比較的若いJIA会員で構成した「特別研究会」を立ち上げ、問題点について話し合う機会を持ちました。

特別研究会ではNPO法人建築家教育推進機構の問題に留まらず、JIA自体の問題点についても話題が及び、意義ある機会となりました。現在、挙げられた意見をもとに下記の変革を行っています。

チラシの刷新

JIA会員へNPO法人建築家教育推進機構の存在を知ってもらう(特別研究会に参加した半数以上の会員がNPO法人建築家教育推進機構の存在を知らなかった)。(図1)

定期講習パンフレットデザインの刷新

多くのJIA会員に受講してもらう(今までのパンフレットはJIA色が薄いため、他団体主催の講習と受け取られていた)。(図2)

定期講習会場に建築家会館を加える

多くのJIA会員に受講してもらい、JIAへの入会者を増やす(定期講習の受講がJIAに入会する機会になればと考えた)。



図1 チラシを刷新



図2 定期講習パンフレット

3. 助成金を受けた教育イベントの例

過去に助成金を受けた教育イベントの事例を挙げます。皆様もご自分が携わっている支部、地域会、委員会、部会で活用できないかご検討ください。

●「都城市民会館見学会」JIA九州支部

(C.見学会・イベント開催)(図3)

解体が決定された都城市民会館(設計:菊竹清訓建築設計事務所)の見学会をJIA九州支部が企画しました。成果品として、見学会の報告書が提出されました。報告書原本はNPO法人建築家教育推進機構にて保管しています。今後公開方法について検討していきたいと考えています。

(助成を受けたイベントのパンフレット)



図3 都城市民会館見学会



図4 ADR調停人とは何か?



図5 商店街の再生とこれから

●「ADR調停人とは何か?」JIAまちづくり委員会

(A.セミナー・講演会の開催)(図4)

JIA会館5F会議室で行われた関東甲信越支部まちづくり委員会主催の講演会です。成果品として講演内容のDVDが提出され、本部ホームページのJIA VIDEO (YouTube) にて公開されています。

●「商店街の再生とこれから/「昭和の町」商店街」都市デザイン部会 (A.セミナー・講演会の開催)(図5)

建築家クラブで行われた関東甲信越支部都市デザイン部会の講演会です。成果品として講演内容のDVDが提出されました。

4. 成果品の活用

提出されたDVDは本部ホームページのJIA VIDEO (YouTube) にて公開されます。このJIA VIDEOは本部ホームページのCPDバナーから入り、最後まで閲覧すると単位が取得できる仕組みができています。



JIA本部ホームページの「JIA VIDEO」(YouTube)で講演会

5. JIA会員の皆様へのお願い

教育イベントを開催しようとしても赤字になってしまう恐れがある時に、NPO法人建築家教育推進機構を思い出して下さい。イベント開催を諦めず、申請をしていただければと思います。

「A.セミナー・講演会の開催」の成果品である動画提出については機材の調達など難しい面があるとの意見も伺っています。今年度からはより多くの会員に助成金申請をしてもらうため、簡単な成果品での助成金申請(金額は今より低くなります)を加える予定です(「令和2年6月16日改訂」の帳票をお使いください)。

JIA定期講習の申し込み、および助成金の申請はJIA本部のホームページより行うことができます。ぜひ、一度ご確認ください。

交流委員会 A グループ

旧三河島污水処分場唧筒場施設
見学会

交流委員会
法人協力 A グループ
三谷セキサン株式会社
賀川昌一

令和元年12月12日、荒川区にある国指定重要文化財「旧三河島污水処分場^{ポンプ}唧筒場施設」を見学しました。総勢11名で約1時間半の見学会となりました。終了後は忘年会を兼ねた懇親会へ。参加者は15名に増え、楽しく早い時間の一夜へと。今は自粛ムード(2020年4月現在)でなかなかできませんが……。

さて、「旧三河島污水処分場唧筒場施設」は、日本で最初の近代下水処理場である旧三河島污水処理場の代表的遺構として、平成19年12月4日に下水道分野の遺構では初めて国の重要文化財(建造物)に指定されました。

見学会は、14時30分「門衛所」前に集合し、東京都下水道局職員の案内でスタート。門衛所を後にし、会議室へと案内されました。そこでは、この施設に係る映画を見せていただき、概要や歴史などさまざまな説明を受けました。この施設は東京市の米元晋一技師を中心として建設がすすめられ、大正11年3月に運転を開始。そのうちの水処理施設は時代とともに最新技術へととなりました。しかし、他施設が更新する一方、唧筒場施設は大正11(1922)年から平成11(1999)年に稼働停止するまで、旧態を保持し続けたようです。

説明終了後は、いよいよ建造物の見学です。ヘルメットと軍手をお借りし、施設へと向かいました。拝見させていただいた施設は以下の通りです。

①門衛所

表玄関として、大正14年に建設。(今回の待ち合せ場所)



旧三河島污水処分場唧筒場施設(東京都下水道局 ホームページより)

②入口阻水扉室上屋

東・西に各1棟ずつあり、メンテナンス等で下水の流れを一時的に止める扉が地下にある。

③沈砂池

下水中の土砂類を沈殿させて取り除く。

④濾格室上屋

下水中のゴミを取り除くスクリーンを設置。

⑤土運車引揚装置(インクライン)用電動機室

下水中から取り除いた土砂類やゴミを積んだ土運車(トロック)を坂の上まで引き上げる機械を設置。トロック設計図は当然ながら青焼、久方ぶりです。

⑥量水器室

下水量を計測するベンチュリメータなる設備が地下に。

⑦唧筒井接続暗渠および唧筒井

二系統に分かれて流入した下水が合流し、各唧筒井に流入。

⑧唧筒室

下水を地下の唧筒井から吸い上げるポンプを10台設置。ここには昔からのクレーンがあり、皆で動かしてみた。

施設内部の見学が終わったところで、外に出て建物をしてみる。夕陽に輝く外観はレンガ造りで、近代化遺産としての趣を発していた。見学会の締めは質疑タイム、お土産にはマンホールカード。一見の価値あります。

最後に、案内をしてくださった東京都下水道局の皆様、懇切丁寧に説明いただき、感謝・感謝です。



見学会参加者で記念撮影

交流委員会 Cグループ

建物見学会

「出雲・松江・米子」報告



交流委員会
法人協力Cグループ
株式会社ニットー
日東英成

交流委員会法人協力会員Cグループでは、毎年恒例で会員企業の工場視察や地方の歴史的建築、最新の建築作品、アート、街並みなどを視察しています。

Cグループは屋根材、金属、建具、アルミ製品、左官材、タイル、レンガなど非常に幅の広いメーカー、施工業者等で構成されており、こういった視察でも各社の情報網が発揮され、見る、歩く、食べるなど非常に内容の濃い視察旅行となっています。

昨年11月8日、9日の2日間、古代神話の面影漂う山陰の出雲・松江・米子を巡りました。最初に訪問したのは「出雲大社」。一畑電鉄の出雲大社前駅からスタートです。

ステンドグラスと膨らみのあるドーム屋根のレトロな駅舎は、昭和5年に建築されたRC造平屋建で、国の重要文化財に登録されています。「神門通り」は出雲大社の参道を延伸する形で整備されたもので、石畳の参道へ景観性の向上と歩車共存の歩ける通りに変わりました。参道には店舗が立ち並び、賑わいがあります。参道を歩くこと5分、いよいよ出雲大社に到着です。

主祭神は^{おおくにぬしのおおかみ}大国主大神。古来より10月は全国の神々が出雲大社に集まり、諸国に神がいなくなることから、「神無月」と言われますが、ここ出雲地方だけは「^{かみありづき}神在月」と呼ばれています。天気もよく、非常にありがたい月に参拝でき幸運でした。

次に向かったのは雲州平田の^{しんじ}木綿街道。宍道湖と日本海に挟まれたこの地域は、江戸時代に木綿業が盛んになり、当時を偲ぶ切妻妻入の商家や白壁の土蔵が数多く残っています。酒蔵や和菓子店などで地元の人たちと会



今回の視察の目玉である「出雲大社」。大きな注連縄が目に飛び込む



出雲大社前駅(昭和5年築)



参道の神門通り。土木学会デザイン賞受賞



木綿街道を学ぶメンバーたち



絶景の足立美術館。まさに日本一



加茂川・中海遊覧船。ガイドが優秀



島根県松江市のシンボル松江城

話も楽しめました。

2日目は日本一の日本庭園として知られる「足立美術館」へ。横山大観はじめ美術工芸品を多数所蔵しています。庭園は徹底した管理で塵ひとつなく、納得の日本庭園でした。土蔵の残る旧加茂川から^{なかうみ}中海へは遊覧船が運行されています。ガイドさんの話に聞きながらしばしの船旅でした。飛来するかもめの餌付けもどきどきの体験でした。

最後に松江市のシンボル「松江城」。山陰地方では天守が残る唯一の城で、別名「千鳥城」と呼ばれ、2015年に国宝に指定されました。1611(慶長16)年に完成した威風堂々たる姿は、まさに千鳥が羽を広げたようです。

今回2日間でしたが、非常に濃密な楽しい時間を過ごすことができました。このような機会をいただき感謝するとともに、今後もJIAの正会員の方々と楽しく交流していきたいと考えています。



松江しんじ湖温泉「松平閣」にてメンバー揃って夕食会

わたしの愛用ツール

建設現場やオフィスで、皆さんはどんなツールを使っていますか？

「わたしの愛用ツール」では、皆さんが普段仕事で使っている愛用品やマストアイテム、人に薦めたい便利なツールなどを紹介します。

今回は、長年使い続けている関数電卓、シャープペンシル、Apple製品と、オリジナルの電気プレートを紹介していただきました。



電卓とシャープペンシル

高橋和夫



「CASIO 関数電卓 fx-115」と「Pentel グラフペンシル PG5」

およそ34年前の1986年1月、現在の仕事の始まりである建築構造設計事務所に入所以来、ず〜っと使い続けている「CASIO関数電卓fx-115」と「PentelグラフペンシルPG5」。

当時はすでに計算尺にとって代わり電卓を用いた計算が主流となっていた。乗除算および三角関数、対数、平方根、立方根などの計算が容易にでき、 $2+3 \times 2 = ?$ 一般的な電卓では「10」としてしまう計算も、正しく四則計算を行い「8」と正解を出してくれ大変重宝している。

設計図はトレーシングペーパーに平行定規を使いシャープペンシルで描いていた。線の太さを一定にするためペンシルを回転させながら線を引いたものだ。回転させるのに邪魔なクリップ部を外せばよりいっそう手にフィットしとても使いやすい。

構造計算の方法も設計図の描き方も当時とは劇的に変わっているが、両者は今でもこれからもず〜っと良き仕事のパートナーである。（スタジオ創）

オリジナル電気プレート

代田正司



ステンレス無垢板のオリジナル電気プレート

16年ほど前、住宅のクライアントの「スイッチプレートのデザインってこれしかないですか？」の一言から、既製では対応できず事務所としてオリジナルデザインの電気プレートをつくることにチャレンジすることとなった。

「材質は金属とし無垢の質感が感じられること」が共有された価値観。試行錯誤の末、プレートはステンレス2mmの無垢板とし、背後の臓物を隠す空間を設けるためステンレスパーの下駄を溶接した。長い付き合いの金物屋さんの献身的な協力もあり、シンプルではあるが存在感のあるプレートが完成した。取り付けると壁面から無垢板が3mmほど浮き上がり、陰影のある立体感も出る。どのような大型プレートも製作可能。しかし問題はプレートとしてはかなり高価なこと、どこ現場でも使うわけにはいかない。16年間で採用を承諾いただいた軒数は6軒ほど。

電気プレートが存在感を主張すべきかは意見の分かれるところだが、拘りのオリジナルとして永く提案していきたい。（アクト建築設計事務所）

Apple Macintosh

中村高淑



職住一体の事務所兼住宅「中村自邸+2つのアトリエ」にある7台のMac

1989年だったか、大学生の時にTEPIAを見に行った。偶然Appleの展示会がありMacに初めて触れた。実家のPC-8001〜9801と違い、コマンドなしに好きな場所に図形が描けることに驚いた。当時、絵が描けるパーソナルコンピュータはMacしかなかった。学生に買える代物ではなかったが、設計事務所で働きだすと先輩が自腹でSE30を購入して事務所に持ち込んだ。1年も経つと、私の担当案件でも全図面がCAD化された。インターネットの普及もあって、独立した1998年にはPowerBookと携帯電話さえあればどこでも仕事ができ、デジタル技術によるデータ共有は第三次産業革命だと思った。iPhoneによってビデオ通話が身近になり、所内や現場でも実践していた。

そして今、新型コロナウイルス感染拡大という非常事態により、一気にテレワークが加速することになった。これからの都市や人々の暮らしや仕事、建築や住宅がどのように変化するのか、時代を生きていきたい。

（中村高淑建築設計事務所）

「JIA・SDGs建築フォーラム2020」開催延期のお知らせ

2020年初めには全く想像も付かなかった、新型コロナウイルスによる大規模な感染が全世界を網羅して広がっています。4月7日に発令された日本の緊急事態宣言は、1ヵ月半余りの自粛期間を経てようやく解除されたところですが、まだまだ予断を許しません。

WHOによるパンデミック宣言の後、委員会では2度にわたり開催の是非を議論いたしました。このコロナ旋風については、SDGsが掲げている地球の持続的発展のための喫緊、かつ具体的な課題として捉え、10月に予定していたSDGs建築フォーラムは開催可能な日程を探りながら、10月30日開

催をいったん延期することを理事会に提案いたしました。

JIAの主な4つの活動の4会議合同会議ではすでに意見交換をスタートさせていますが、今後も引き続き議論いただき、より充実した「SDGsへの建築家からの発信」ができればと期待をしています。日々の糧に追われながらも、地球の未来という大きな視点もJIAだからこそ見失ってはいけないとの思いからです。

今後もいっそうの皆様のお力をお借りしたいと思います。

(JIA・SDGs建築フォーラム2020実行委員会 委員長 上浪 寛)

建築系学生のための情報サイト「LUCHTA」と連携しています

<https://luchta.jp>

広報委員会は、法人協会員企業の(株)建築資料研究社／日建学院が企画運営する、建築系学生のための情報サイト「LUCHTA」と連携しています。支部のさまざまなイベント(特に学生向け)を広報が情報提供し、サイトで発信することでJIAの活動を学生に知ってもらう機会にもなっています。

今後は、『旅の追憶』—建築家がおすすめる 実際に見に行きたい建築物5選 など、「LUCHTA」に掲載する新企画を検討中です。ぜひお楽しみに！

(広報委員会 HPWG 主査 中澤克秀)



ステイホーム

編集後記

- こんなに風が気持ちが良いのに外出のできないGWや毎週末、中庭にテーブルを出して1日中過ごしています。(関本)
- 自宅兼用事務所で家に居ることが多いが、この春は庭の花をじっくり観察できて、新たな発見もあり、ステイホームも悪くない。(中澤)
- プラモデル作ろうと思い立ち宝箱を開けると、未開封9箱、制作途中のバイク3台が出てきました。そっと宝箱を閉じました。(市村)
- 社員は自宅リモート作業なので、1人事務所内にて自粛のはずが、工事現場は進み、やむなく打ち合わせに行くことになったGW。(望月)

- ステイホーム期間に、行き場に困っていた保護犬を家族に迎え入れました。家族全員が癒され、毎日トイレに苦戦し、退屈できない毎日となっています。(長澤)
- 2月末に自宅の引越し。子育て環境を考えてのことでしたが、なんとも偶然的なタイミング。環境の大事さが身に沁みます。(会田)
- 断捨離や片付け、庭仕事などため込んでたコトを少しずつやろうと思っています。(吉田)

編集 : 公益社団法人 日本建築家協会
関東甲信越支部 広報委員会

委員長 : 市村宏文

副委員長 : 中澤克秀

委員 : 会田友朗・吉田 満・望月厚司・関本竜太

編集長 : 会田友朗

副編集長 : 関本竜太

編集ワーキングメンバー : 広報委員+長澤 徹・中山 薫・有泉絵美・八田雅章・立石博巳

編集・制作 : 南風舎

Bulletin 284 2020 夏号

発行日 : 令和2年6月15日

発行人 : 大西摩弥

発行所 : 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA 館

Tel : 03-3408-8291(代) Fax : 03-3408-8294

印刷 : 株式会社 協進印刷

■ JIA 関東甲信越支部関連サイト一覧

・(公社) 日本建築家協会 (JIA) <http://www.jia.or.jp/>

・JIA 関東甲信越支部 <https://www.jia-kanto.org/>

■ 定価 300円+税/会員の購読料は会費に含まれています。

© 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 2020

出版、資格講座、定期講習、そして建築学生への支援

これからも、
建築家を
応援するために。

私たちは
NPO建築家教育推進機構とともに、
一級・二級建築士のための
建築士定期講習を主催しています。

住宅建築 造景

庭
NIWA

LUONTA

CONFORT



株式会社 建築資料研究社 日建学院

☎ 0120-243-229 (日建学院コールセンター)
東京都豊島区池袋 2-50-1 <https://www.ksknet.co.jp>

一級建築士／二級建築士／建築設備士／1級建築施工管理技士／
2級建築施工管理技士／1級土木施工管理技士／
2級土木施工管理技士／宅建／土地家屋調査士、等
建築・土木・不動産分野を中心に資格講座を多数開講